読書科学

第17巻 第2号（通巻 第64号） 昭和48年 9 月30日 発 行（季刊）

高校生の読書傾向とその意識 平賀 増美
漫画の文法と読みのモデル 阪本 一郎
悪の許容に到る発達的特徴 松原 俊一
中学校の説明的文章の教材研究 荻原 吾郎

64

日本読書学会

◇本　号　目　次◇

原　著

高校生の読書傾向とその意識——全寮制高校の
読書調査（1967—1971）より——　亜細亜大学　平賀増美　35

漫画の文法とその読みのモデル
立正女子学園短期大学　阪本一郎　48

実践報告

悪に陥る人間に対する許容に到る発達的特徴
——「五色のしか」の感想文にみる4・5年生からの報告——
東京都港区立港南小学校　松原俊一　57

中学校の説明的文章の教材研究
——北杜夫「せみの話」の場合——　埼玉県本庄市教育委員会　荻原吾郎　65

資料紹介

情報公害意識の調査と対策　71

会　報　72

日本読書学会役員（昭和47年4月1日～昭和49年3月31日）

会　長（理事長）滑川道夫
副会長（副理事長）倉沢栄吉

常任理事	出雲路　猛	岡本　奎六	阪本　敬彦	深川　恒喜
	福沢　周亮	増田　信一	室伏　武	
理　事	今村　秀夫	大神　貞男	岡田　明	尾原　淳夫
	佐藤　泰正	藤田　圭雄	村石　昭三	望月　久貴
	弥吉　菅一	吉井善三郎	渡辺　茂男	
監　事	平沢　薫	山本　晴雄		
編集委員	出雲路　猛	増田　信一	室伏　武	阪本　敬彦
	高木　和子	John Downing	Donald Leton	

高校生の読書傾向とその意識*

——全寮制高校の読書調査（1967～1971）より——

亜細亜大学
平　賀　増　美**

はじめに

わたくしは，昭和40年4月より，同46年4月までの6年1か月の間，東京都立秋川高等学校（全寮制高校）に奉職した折，当時の高校生読書に関して，簡単なる調査を試みた。しかし，その調査はその際明確なる目的をもって行なわれたものではなく，まして，外部に発表するつもりも，また，使用するつもりもなかった。単に，その年その年の生徒の実態をつかみ，指導の手がかりを得また，運営の参考にしようとしたものであった。そのため，設問も特別な意図をもったものではない。他校との比較を知ることができるようにと，毎日新聞社の「読書世論調査」昭和40年実施のものを骨子として，ほかに学校独自で調査したい事項を年々付加しながら実施してきた。そのため，いま各年を一瞥してみると，設問にあいまいな点や，また，不統一の部分が多々みられる。

ところで，近ごろ，高校生の読書が質，量ともに低下し，特に不読者層が広がりつつあると聞く。そこで，不本意ながらかっての調査をふりかえってみることにした。すでに述べたように，調査は全寮制高校であるのでその結果がただちに一般に通用するか否かは疑問ではあるが，考え方によっては，全寮制であることから，その生活が標準的高校生の姿であるともいうことができようか。むしろそれが，高校生本来の姿であるとさえ考えられるのである。

ともあれ，第3回調査，昭和42年実施分（40年創設のため，42年に3年次をむかえ3学年充足した）より，最新の第7回，昭和46年実施分までの5か年間について，同一の設問のみをまとめてみた。この結果から，現代の高校生の読書傾向を知り，そして，これからの読書指導の参考にでもなれば，と思うのである。

調査校の概要と調査方法

1）調査校名：東京都立秋川高等学校（全寮制）

2）概要：この学校は，昭和40年4月，公立の全寮制高等学校として開設された。生徒は男子のみで1クラスの生徒数は40名，各学年6クラス編成で全18学級，全校720名となる。この学校の教育は自主独立の人材の育成をめざし，教育方針に，①教育における学校生活と寮における協同生活とを通じて，自由と責任，協同と勤労を重んずる態度を育成。②個別指導により個性の伸張と能力の開発をはかる。③自発学習と広い読書をすすめて学力の充実，向上をはかる。（以下略）などをあげている。

3）施設：校地約5万坪の中に，普通校舎棟，特別教室棟，管理棟，図書館，体育館，寮棟，食堂，保健棟等がある。

4）図書館の概要：図書館は独立建物。校舎棟と寮棟との中間に位置して，陸橋で連絡されている。広さ540㎡。閲覧室，準備室，ブラウジング・コーナー，書庫

---

* Senior high school students' reading interests and attitudes.

** HIRAGA, Masumi, Asia University

視聴覚室・同準備室等がある。閲覧室，視聴覚室とも各100名収容可，ことに視聴覚室は学習室として兼用することもできる。開館時間は 9.00A.M－9.00P.M，ただし土曜は4.00 P.Mまで。専任職員として，昭和45年度までは司書教諭1名，助手2名，46年度以降は司書教諭不在。

5） 調査方法：質問用紙を各クラスに配布し，クラス担任または各クラスの生徒図書委員の協力のもとに回答を求めた。使用時間は約20分，被調査数は3,254名，回収率は93％である。実施時期は昭和42年から46年のそれぞれ11月下旬である。集計は各クラスごとに行ない，次いで全学年をまとめて，毎年度末，年次報告書の形で印刷，発行した。ここで使用したデータは，この年次報告書によるものである。

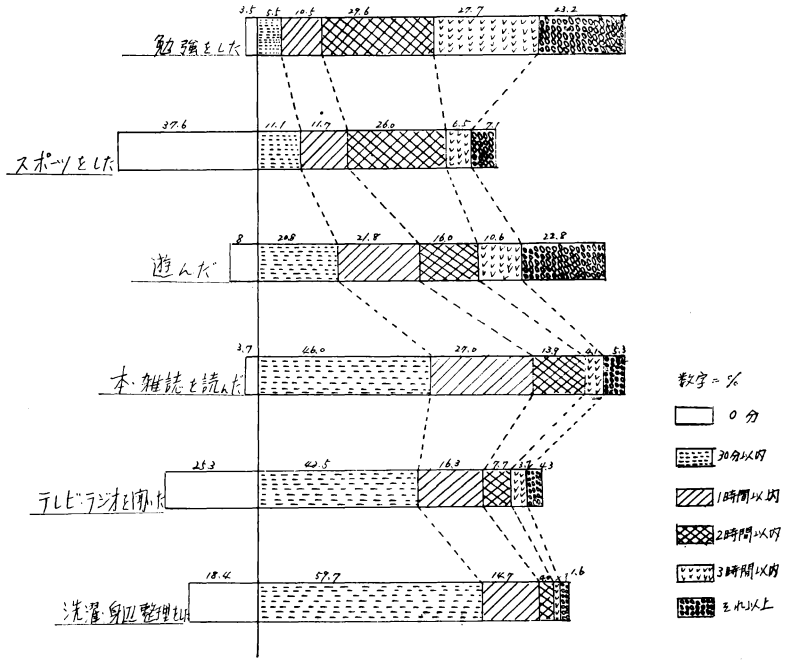
1. 生活時間における読書の位置

問：あなたは次のことをするのに，この1週間を通じて，平均1日あたり，何にどのくらいの時間を使いましたか。

これは1週間を通じて，1日平均正規のスケジュールのほかに，何に何分ぐらいの時間を使用したかを調べ，日常の生活の中での読書の位置を知ろうとしたものである。もっとも多くの時間を費やしているのは，学習面で，約半数のものは，1日に2時間ないし3時間をこれにあてている。この学校では，3時間を寮で定められた学習時間としているので，ほとんどのものは規定通りの時間を勉強していることが知られる。しかしながら，23.2％のものは3時間以上，つまり規定以上の時間を勉強している。これと対照的なのが，学習時間0分というものであり，これが3.5％となっている。

学習に次いで多くの時間をかけているのはスポーツである。スポーツをすすめるのは，この学校の教育方針の一つでもあり，学校一斉のスポーツの時間を週2日設けているほどである。そのためかスポーツ0分というものが38.6％をしめているが，これは，全くスポーツをしないということではなく，学校一斉に行なわれるそれで充分ということであろう。しかし，半数のものはさらに1時間半前後のスポーツをしている。

表1　生活時間の使い方



本・雑誌・新聞等は，96%のものが毎日読んでいる。その時間は15分から，多いものは3時間以上と巾が広い。平均すると約1時間がこの学校の生徒の読書の時間ということになる。しかし，この時間は，継続して読んだ時間であるのか，あるいは断片的に読んだ時間をプラスした時間であるのか明らかではない。また，問いかけが不十分であったために，0分と答えたものの中に，身近なもの，たとえばパンフレット類などを読んだものもいよう。あるいは，勉強したものの中にも，読書を含んでいるものがあるかもしれない。ここでは時間的なことのみで，読書の質については知ることはできない。

ラジオ・テレビについては4分の1の25%は0分である。3時間以上というものがわずか4.3%いるが，平均して30分前後ということになる。テレビの普及により，読書の時間が浸食されてきたとは，よくいわれることであるが，ここではこれは通用しないようである。

洗濯その他の身辺整理には，80%のものが，30分前後をあてている。この他，単に遊んだというものの時間はまちまちで，まったく遊ばなかったもの8%，3時間以上のもの22.8%で，平均1時間前後となっている。

ところで，この資料から1人平均1日あたり，何に何分使用するかを概算すると，111分勉強し，96分スポーツをし，53分本や雑誌を読み，47分ラジオを聞き，27分洗濯・身辺整理をし，63分休息のために遊び，1日を終えるということになる。

読書の時間53分というのは，雑誌・新聞も含まれているので，決して多い時間とはいえないが，読書を習慣化するためには，貴重な時間であるといえる。

2. 本・雑誌・新聞・ラジオなどの目的別利用方法

問：あなたは，本・雑誌・新聞・ラジオなどをふだんどのような目的のために使っていますか。

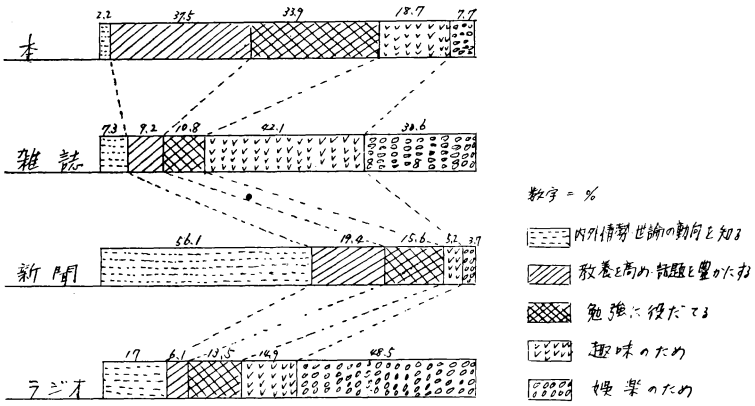
これは本・雑誌・新聞・ラジオなどの利用目的をたずねたものであり，日ごろどのような態度でこれらマス・コミに接しているかを調べようとしたものである。（テレビを除外したのは，学校内でテレビ視聴可能な場所は食堂であるが，その利用状況をみるに，通常の学校生活の中ではテレビのしめる位置は低く，特に設問の必要を感じなかったからである。）

さて，本はどのような目的のために利用されているかというと，第1に教養を高めたり，話題を豊かにするためというものが最も多く，37.5%をしめている。次いで勉強のため33.9%，趣味のため18.7%となっている。

これに対して，雑誌は趣味のためというのが圧倒的に多く，42.1%，次いで娯楽30.6%となり，教養や勉強のためというのはごく少数である。このことから，本を読む態度と雑誌のそれとははっきり区別されていることがわかる。

新聞は，約6割に近い56.1%のものが，内外情報や世論の動向を知るために読んでいる。次いで，教養や話題

表2　本・雑誌・新聞・ラジオなどの利用方法



を豊かにするために19.4%，勉強のために15.6%となっており，趣味・娯楽のためというのは，ごく少数である。これは，新聞の役わり，特性に相応した読まれ方であるといえよう。

ラジオは，約半数の 48.5 %が娯楽用としている。また，2割近い17%のものが内外情勢や世論の動向を知るために用いている。

こうみてくると，内外情勢や世論の動向を知るためとして新聞が利用され，教養を高めたり，話題を豊かにするため，あるいは勉強のためには本が利用され，趣味としては雑誌が，娯楽としてはラジオが用いられている。最も多方面に活用されているのは本——図書であるが，その他いずれの場合も，それぞれのメディアの特性をよくふまえて，目的にそった使い分けがされているとみることができるようである。

3. 読まれている雑誌＜月刊誌・週刊誌＞

問：ふだんどんな雑誌を読んでいますか。

表3 よく読まれた月刊雑誌

順位	42 年	順位	43 年	順位	44 年	順位	45 年	順位	46 年	順位	計	実数
1	高一二螢雪時代	1	高一二螢雪時代	1	高一二三コース	1	高校一二三コース	1	高一二螢雪時代	1	高一二三コース	525
2	高一二三コース	2	高一二三コース	2	高一二螢雪時代	2	高一二螢雪時代	2	高一二三コース	2	高一二螢雪時代	509
3	イングリッシュ・エイジ	3	文芸春秋	3	文芸春秋	3	スクリーン	3	スクリーン	3	スクリーン	91
4	リーダーズ・ダイジェスト	4	サッカーマガジン	4	スクリーン	4	リーダーズ・ダイジェスト	4	サッカーマガジン	4	文芸春秋	90
5	ボーイズ・ライフ	4	中央公論	5	ライフ	5	サッカーマガジン	5	明　星	5	サッカーマガジン	73
6	サッカーマガジン	6	イングリッシュ・エイジ	6	中央公論	6	ミュージック・ライフ	6	平　凡	6	リーダーズ・ダイジェスト	67
7	文芸春秋	7	リーダーズ・ダイジェスト	7	明　星	7	明　星	7	オートバイ	7	イングリッシュ・エイジ	59
7	高校英語研究	8	世　界		—	8	山と溪谷	8	文芸春秋	8	明　星	52
9	NHK英語会話	9	鉄道ファン		—	9	文芸春秋	9	モーターサイクリスト	9	中央公論	45
10	世　界	9	宝　石		—	9	テニスマガジン	9	イレブン	10	平　凡	36

—印　不明

表4 よく読まれた週刊誌

順位	42 年	43 年	44 年	45 年	46 年	計	実数
1	少年マガジン	平凡パンチ	少年マガジン	少年マガジン	少年マガジン	少年マガジン	557
2	少年サンデー	少年マガジン	平凡パンチ	少年ジャンプ	少年ジャンプ	少年サンデー	381
3	平凡パンチ	朝日ジャーナル	少年サンデー	少年サンデー	平凡パンチ	平凡パンチ	376
4	朝日ジャーナル	少年サンデー	朝日ジャーナル	平凡パンチ	少年サンデー	朝日ジャーナル	228
5	プレイボーイ	サンデー毎日	プレイボーイ	少年キング •	ビックコミック	プレイボーイ	211
6	少年キング	プレイボーイ	少年キング	プレイボーイ	プレイボーイ	少年ジャンプ	204
7	週刊朝日	週刊朝日	少年ジャンプ	少年チャンピオン	少年キング	少年キング	135
8	サンデー毎日	マン画アクション	週刊朝日	週刊朝日	少年チャンピオン	週刊朝日	120
9	—	少年キング	サンデー毎日	朝日ジャーナル	週刊FM	サンデー毎日	107
10	—	—	ビッグコミック	ビッグコミック	朝日ジャーナル	ビッグコミック	80

<月刊誌>

月刊誌のうち，最も多く読まれているのは，学習・受験雑誌の「高一二三コース」「高一，二蛍雪時代」で，1，2位をしめている。しかし，年次ごとにみると，その数は次第に減少の傾向にある。たとえば，「高校コース」では，42年に207名，43年146名，44年67名，45年59名，46年46名となっており，44年から急速に減少している。「高校時代」にしても，同様の傾向を示している。この原因は明らかではないが，考えられることの一つには，それまで各寮棟に数冊ずつ備えつけていたが，その後寮に置かないようになったことに起因しようか。つまり，資料への accessibility がなくなったことで利用が著しく減少したといえる。

3位は「スクリーン」，4位「文芸春秋」，5位「サッカー・マガジン」と，娯楽・総合・スポーツ関係など，多方面にわたっている。「サッカー・マガジン」が多く読まれているのは，この学校の校技がサッカーであることと関係するだろう。

総合10位以下のもので，比較的多くの読者を得ているものは「世界」「朝日カメラ」「山と溪谷」「カー・グラフィック」「鉄道ファン」「ミュージックライフ」「高校英語研究」「NHK英語会話」「美術手帖」「時刻表」等である。

<週刊誌>

週刊誌では，1位は「少年マガジン」で，圧倒的人気を得ている。次いで「少年サンデー」「平凡パンチ」となっている。4位「朝日ジャーナル」，8位「週刊朝日」，9位「サンデー毎日」のほかはすべて娯楽・マンガものである。この表から週刊誌は娯楽用と情報との二つの方面に用いられていることが知られる。

月刊誌と週刊誌とを総合すると，1位は，「少年マガジン」，2位「高一二三コース」，3位「高一二・蛍雪時代」，以下「少年サンデー」「平凡パンチ」「朝日ジャーナル」「プレイボーイ」「少年ジャンプ」「少年キング」「週刊朝日」の順となっている。2・3位のほかはすべて週刊誌で，特に娯楽雑誌が多いが，この表でみると，学習・受験雑誌の数も相当にのぼり，高校生の受験への姿勢が反映されている。

なお，ここにあげられた雑誌——月刊・週刊誌を各分野ごとに分類してみると，次のようになる。

総合雑誌：「朝日ジャーナル」「週刊朝日」「サンデー毎日」「文芸春秋」「中央公論」「世界」「リーダース・ダイジェスト」

学習・受験：「高一二三コース」「高一二蛍雪時代」「Euglish Age」「高校英語研究」「NHK英語会話」

スポーツ：「サッカーマガジン」「イレブン」「テニス・マガジン」

芸術：「ミュージック・ライフ」「スクリーン」「朝日カメラ」「美術手帖」

乗物・旅行：「オートバイ」「鉄道ファン」「モーターサイクリスト」「旅」

娯楽・マンガ：「プレイボーイ」「平凡パンチ」「ビッグ・コミック」「明星」「平凡」「少年マガジン」「少年ジャンプ」「少年サンデー」「少年キング」「少年チャンピオン」「マン画アクション」

こうみてくると，ほとんどの分野について数点あげられているが，たとえば天文関係，無線関係など，自然科学および工学関係のものが欠けている。最も多いのは娯楽・マンガ関係で，いわゆる目でみて素通りするものが読まれ易い。どうしてこのようにマンガが読まれるのであろうか。受験勉強の息ぬき，または日常の学習およびその他ハードスケジュールの気休めということがいえようが，この時代は，子どもの時代から大人の時代への過渡期でもあり，大人の世界への関心が強いということがいえる。特に，現在のマンガは，昔のマンガと違って，大人と子どもの区別がなくなっているし，マンガによって，大人の世界を垣間見ることができる。また，大人にとっても楽しむことができるというもので，マンガの読書状況は，近年の社会的傾向としてとらえることができよう。

4. 1か月の読書量

表5： 1か月間に読んだ本の冊数

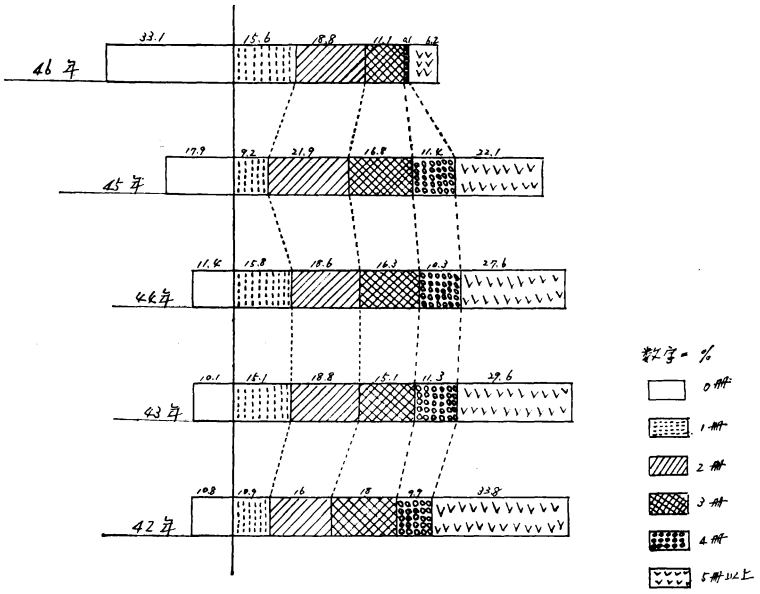
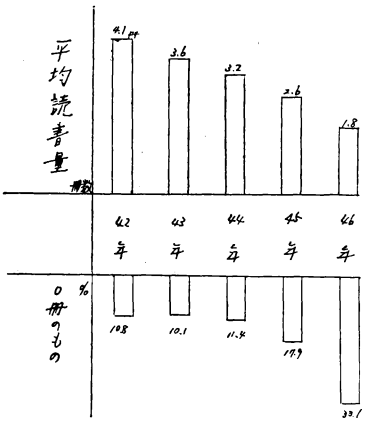


表6： 1か月の平均読書量と，1か月間1冊も読まなかった者



問‥あなたは，この1か月の間に本を何冊ぐらい読みましたか。（教科書，雑誌，新聞，学習参考書を除く）

1か月にどのくらいの量の読書をするかをたずねたものであるが，その結果は，非常に個人差があるということである。つまり，1冊も読まないものから，多いものでは20冊以上というものまでいる。全体では，1人だいたい2～3冊読んでいるものが多く，3分の1をしめている。年次ごとに読書量の変動をみると，次のようになる。

まず1人あたりの平均冊数からみると，42年 4.1冊，43年 3.6冊，44年 3.2冊，45年 2.6冊，46年 1.8冊と年々減少している。全体の平均は3.1冊となる。1か月に4冊，つまり，1週1冊の割合で読んでいるものは，42年から45年までは毎年約10%いたものが，46年では急に減少して，0.1%となっている。この減少の徴候は1冊も読まなかったものの数にも現われ，42年では0冊は10%であったものを，46年では33%と急増している。平均すると1冊も読まないものは20%にもおよび，ますます読書量が低下して来つつあることは，否みがたい。

では，この読書の時間はどこに使われているのであろうか。問1の「生活時間の使い方」について，年度ごとの相関をみると顕著な現象としては「遊んだ」「スポーツ」の二項目に変動がみられる。つまり，一日のうちに3時間以上遊んだものは，44年，45年においては，それぞれ50名，60名であったものが，46年では一挙に123名に上昇している。一方，スポーツでは，0分は58名，172名，216名というように，年々スポーツをしないもの

の数が増加している。読書量低下とともにスポーツ面でも低下の現象がみられ，反対に遊びの時間がふえていることが，やや際立った現象といえる。

「読書世論調査」（毎日新聞社）では，「39年ごろから不読者は急ピッチに増加しはじめた……なぜこのころから増加したかを推定するのは容易ではないが，その1つとしてテレビの普及をあげるのは見当ちがいではあるまい。というのは，第1にテレビの普及が急速に進んだのがこのころ……」と（注1），その原因が推定されている。しかし，この学校においては，不読者が増加したのは，昭和46年で他校より数年遅い。これは中学時代に家庭でテレビを見馴れた人達が入学してきたためであろうか。テレビに熱中し，読書がおろそかにされている。そういう習慣の人たちが，突然，身近にテレビのない生活にはいって来て，すぐには読書の世界になじめず，いたずらに時を過ごすものが多くなってきたのではなかろうか。

とするとこうした時期の指導こそ大事であると思われる。また，ここでは，実際の指導にあたる人的要因，就中司書教諭の意義について改めて考えてみる必要があるかもしれない。

5. よく読まれた本と好きな著者

問：この1か月の間に読んだ本をおぼえているだけ書いて下さい。わかったら著者も書いて下さい。また，あなたの好きな著者は誰ですか。

この1か月の間に読まれた本を書名別にみると，1位は「ドクトル・マンボウシリーズ」で，2位は「武器よさらば」，3位「こころ」となっている。これを年次ごとにみると，次のような相違がみられる。まず，42年では1位は「友情」で，「ドクトル・マンボウシリーズ」は，ベスト10にさえ見られなかった。ところが翌，43年に突然登場し，以後毎年1位を保っている。43年は「雪国」が2位に，「古都」が3位にと，川端文学が多く読まれている。これは，この年，川端康成のノーベル文学賞受賞発表の影響によるものであろう。44年は，この年のベスト・セラー「赤ずきんちゃん気をつけて」が2位に，45年は文学作品より，ノンフィクションの方が多く読まれ，特に，歴史ものが目立っている。46年は，日本の作品に集中し，外国の作品はベスト10には登場していない。

毎年着実に数人の読者を得ている作品は，日本文学では「こころ」「人間失格」，外国文学では「武器よさらば」「車輪の下」などである。46年を除いて，一般に文学作品がほとんどをしめており，また，日本文学と外国文学との比率は 2：1 で，日本文学が多い。この傾向

表7　この1か月に読まれた本―書名―

順位	42 年	順位	43 年	順位	44 年	順位	45 年	順位	46 年	順位	計	実数
1	友　情	1	ドクトルマンボウシリーズ	1	ドクトルマンボウシリーズ	1	ドクトルマンボウシリーズ	1	ドクトルマンボウシリーズ	1	ドクトルマンボウシリーズ	68
2	武器よさらば	2	雪　国	2	赤ずきんちゃん気をつけて	2	高校生	2	こころ	2	武器よさらば	33
3	あすなろ物語	3	古　都	3	武器よさらば	3	中国の歴史	3	人間失格	3	こころ	31
4	車輪の下	4	赤と黒	4	かなしい王様	4	武器よさらば	4	友　情	4	友　情	27
4	あいつと私	5	車輪の下	4	月と6ペンス	5	日本の歴史	5	坊っちゃん	5	雪　国	25
4	人間の運命	5	デミアン	6	されどわれらが日々	6	老人と海	5	戦争を知らない子供たち	6	人間失格	16
7	万延元年のフットボール	5	罪と罰	6	異邦人	6	論語物語	6	はるかな国遠い国	7	車輪の下	16
8	雪　国	5	こころ	6	変　身	8	世界の歴史	6	それから	8	あすなろ物語	15
8	三四郎	5	人間失格	6	人形の家	9	氷　点	8	雪　国			
8	こころ					9	世界史概観	8	自由と規律			

表8　読まれた本の著者

順位	42　年	順位	43　年	順位	44　年	順位	45　年	順位	46　年	順位	計	実数
1	石坂洋次郎	1	川端康成	1	北　杜夫	1	北　杜夫	1	夏目漱石	1	北　杜夫	157
2	夏目漱石	2	北　杜夫	2	大江健三郎	2	ヘミングウェイ	2	武者小路実篤	2	夏目漱石	137
3	井上　靖	3	ヘルマン・ヘッセ	3	井上　靖	3	星　新一	3	北　杜夫	3	石坂洋次郎	122
4	川端康成	4	ヘミングウェイ	4	石坂洋次郎	4	石坂洋次郎	4	太宰　治	4	川端康成	101
4	武者小路実篤	5	太宰　治	5	ヘミングウェイ	5	江戸川乱歩	5	三島由紀夫	5	ヘミングウェイ	87
6	太宰　治	6	石坂洋次郎	6	川端康成	6	夏目漱石	5	五木寛之	6	武者小路実篤	83
7	ヘミングウェイ	7	夏目漱石	7	武者小路実篤	7	大江健三郎	7	志賀直哉	7	太宰　治	76
8	北　杜夫	8	井上　靖	7	ヘルマン・ヘッセ	8	安倍公房	8	森　鷗外	8	井上　靖	75
9	大江健三郎		—	9	ドストエフスキー	9	川端康成	9	小林秀雄	9	大江健三郎	61
10	森　鷗外		—	10	夏目漱石	10	三島由紀夫	10	井伏鱒二	10	ヘルマン・ヘッセ	60
10	ヘルマン・ヘッセ		—	10	カ　ミ　ユ	10	貝塚茂樹	10	川端康成		—	

表9　好きな著者　　実数

順位	書名＼年	42	43	44	45	46	計
1	夏目　漱石		29	32	17	12	90
2	北　　杜夫		24	21	23	10	78
3	ヘミングウェイ		23	18	12	12	65
4	太宰　　治		18	18	5	7	48
5	井上　　靖		12	17	10	6	45
6	石坂洋次郎		8	18	9	5	40
7	ヘルマンヘッセ		11	16	6	5	38
8	芥川竜之介		10	10	7	6	37
9	武者小路実篤		10	7	6	10	33
10	五木　寛之		—	8	7	12	27
11	川端　康成		15	11	—	—	26
11	大江健三郎		—	16	6	—	26

42年は調査せず

は，この学校のみのものでなく，「高校生になると……文学作品の比重が大きい。男子は日本の名作，女子は外国の名作をと好みがわかれてくる」（注2）といい，一般の高校生の傾向と同じようである。

次に，著者別にみると，42年は1位は石坂洋次郎，2位夏目漱石となっており，書名で1位をしめた「友情」の著者，武者小路実篤は5位にさがっている。これは，武者小路の作品では「友情」に特に読者が集中しているということを示すものとみてよいだろう。43年は，1位は川端康成で，これについてはすでに，書名のところでふれている。44年は，外国の作家が他の年に比較して多く登場している。45年は，歴史ものが多く読まれた年であるだけに，歴史家の貝塚茂樹がベスト10にはいっている。46年は，書名の方では，日本の作品のみであった年であり，この年は1位夏目漱石となっている。このように，大体書名の方と対応しているといえる。なお，書名の方には，三島由紀夫の作品は，ベスト10にはみられなかったが，著者では，45年，46年とも登場している。これは，例の事件に関連して，三島文学に関心がもたれ，多方面から読まれたことを語っている。

全般的にみると，多く読まれているのは内外の名作であり，それも文学，わけても小説に集中している。しかしながら，たとえば「チボー家の人々」「ジャン・クリストフ」「戦争と平和」などの長編ものは，この調査が読書週間後の読書の秋に行なわれたものであるにもかかわらず，登場しない。長編ものが読まれないのは，継続した時間の確保が困難なためか，あるいは根気の問題であろうか。また，小説以外の面から人間の心をゆさぶるもの，たとえば詩歌などもここには見られなく，まして「三太郎の日記」とか，「愛と認識との出発」など，か

っての人々――特に学生に深い感銘を与えたといわれる，いわば考えるための本などもみることはできない。この傾向は，この学校のみのものではなく，全国の同じ世代の同じ傾向といえるようである。「マス・コミュニケーションと物質文明の急激な発達とによって，人間の思考の方向が内から外へ，また，精神から物質へと変質」注3）してきたことの一つの現われとでもいえようか。別の言い方をすれば，若い人の志向性が昔のそれと著しく変化してきたと言っても過言ではあるまい。

ところで，これを「好きな著者」という面からみると，日本では1位は夏目漱石，外国ではヘミングウェイとなっている。北杜夫はそうとう読まれているにもかかわらず，好きな著者という範疇からははずれて，2位になっている。次いで太宰治，井上靖，石坂洋次郎，ヘミングウェイの順となっている。

好きな著者と，読んだ本の間には，その順位において，多少の開きはみられるが，総じて大きな相違もみられないのは，高校生になると，読書の興味，傾向がある程度個性化しているからといえる。この時代の読書は，誰でもが読むことを好む普遍的なものと，時代の流れの中で彼らの関心をとらえるものとに分けることができるが，この調査には前者の傾向，つまり，名作ものへの集中が強く現われている。これは，すでに名声のきまった本に対する信頼感からくるものであろうか。読書の価値基準が社会的評価の影響を強くうけているということがいえる。

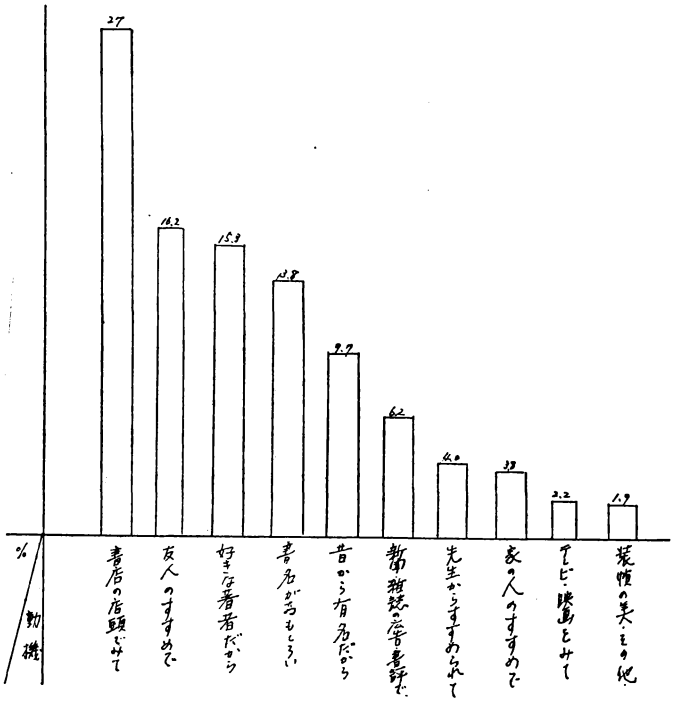
6. 読書の動機

問：それらの本を読んだのは，どんな動機からですか。

これは，1か月の間に読んだ本の動機をたずねたもので，その動機の第1位は，書店の店頭でみたものである。表は，多いものの順に示されているが，それをさらに分類すると次のようになる。

第1は嗜好によるもので31％（好きな著者，書名がおもしろい，装幀が美しい），第2は実物によるもので27％（書店の店頭で選ぶ），第3は人間関係によるもの24％

表10： それらの本を読んだ動機



（友人のすすめ，先生のすすめ，家の人のすすめ），第4は有名度によるもの9.7%（名作だから），第5は各種メディアによるもの8.4%（広告や書評，映画，テレビ）となっている。

こうみてくると，高校生の読書は，自我の確立と個性的な読書とがあいまって，読書興味や嗜好がそうとう強く働いているとみることができる。つまり，第1の嗜好はもちろん，第2の実物を見て選ぶものも，第1の条件に近いものがそうとうあるとみられ，両者を合わすと60%となる。こうなると，読みものに対する accessibility が高いか否かということがまず問題となる。また，読書のおもしろさが体得出来ているか否かも問題であり，したがって，高校時代以前の読書生活のあり方も重要となってくる。

人間関係によるものでは，友人のすすめが圧倒的に多く 16.2 %で，教師のすすめはわずか4%である。これは，教師が本をすすめること，本の話をすることをしないからではなかろうか。授業中にすすめられた本や，ホーム・ルームなどで話題となった本は，図書館へすぐ反映されることは，図書館での仕事の経験のあるものなら，誰でも知るところであろう。ことあらためて行なう読書指導もそれなりの意義はあるが，各教師が授業のあい間や，その他の時間に，さりげなく話す本の話に，生徒はそうとう感ずるものをもつことは，明らかである。なお，教師にすすめられて読んだものを学年別にみると，1年104名，2年119名，3年39名で，2年が最も多い。2年は，貸出その他においても，3学年のうちで最も意欲的に読書活動している。

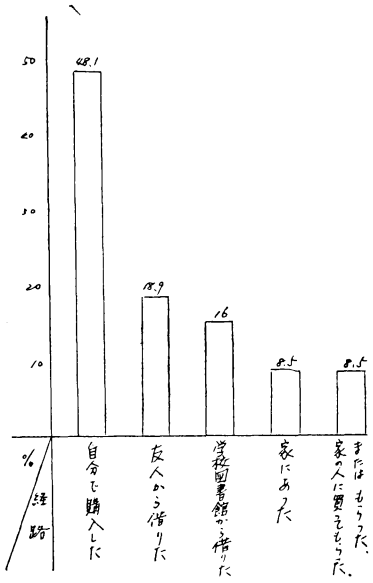
メディアによるもののうちでは，新聞の広告や書評によるものの方が，映画やテレビのそれよりも影響が大である。

読書の動機をみて，全般的にいえることは，指導の方法によっては，読書の傾向を変えたり，あるいは読書力の低いものにその力をつけさせることができるだろうか，ということである。これは読書指導のあり方や，方法が改善されなければならないという，わたくしどもにとって，大きな問題を提起しているといえる。そのためには，まず，教師自身がもっと本を読み，そのおもしろさ，楽しさを生徒に伝えるということではなかろうか。

7. 本の入手経路

問： それらの本はどのようにして入手しましたか。

表11： 入手経路



入手経路をみると，48%のもの，約半数は自分で購入している。これは問6の読書の動機でみたように，書店の店頭でみたのが1位であったのと対応している。次は借りたもの35%で，友人から18.9%，学校図書館から16%となっている。「読書世論調査」（毎日新聞社）では，学校図書館から借りたものは 1966——1969 年の平均が 38.7%と高い率を示しているが，この学校の場合，創設間もないことから蔵書数の少ないこと，および読みたい本は自分で購入するという購入能力の高い家庭環境などに起因しようか。家にあったから読んだというものは 8.5 % と少なく，これは家を離れての生活であることを語っている。なお，もらったから，というものがあるが，これは，この学校習慣の一つとして，誕生日に学校から1冊の本を贈ることになっているためで，3年間には3

冊が学校から贈られることになるが，これらの本であろうと思われる

全体的にみると，個人的にほしい本は自分で購入し，学習に必要なものは，学校の図書館から借りているものとみることができる。

なお，ここで，たとえば，買ったもののうちその費用は小遣の何パーセントをしめているか，1人平均何冊くらい購入しているか，あるいは自分で購入したものがどのくらい読まれているかなどの詳細な設問をこころみたならば，読書生活をもつとはっきりとらえることができたであろうし，また，読書に対する比重も判明したと思われるが，これらについては知ることができなかった。

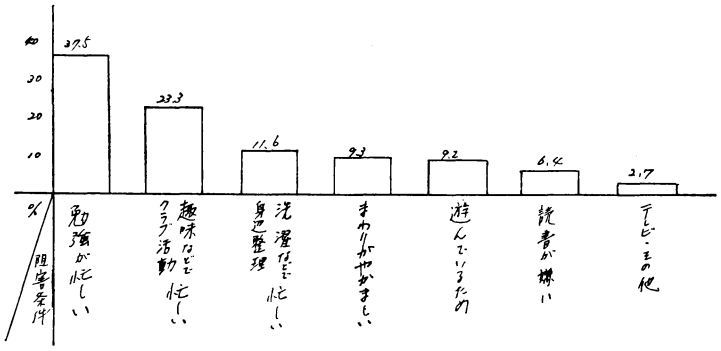
8. 読書を阻むもの

問： あなたの読書を阻害するものがありますか。もしあったらそれは何ですか。

でもみたように，1日平均30分前後を身辺整理・洗濯に費やしているところをみると，全寮制の生徒らしい悩みではある。しかし，これも3年になるとその処理方法がうまくなるのか，ずっと減少している。第4は，まわりがやかましくてとか，遊んでいるためとなっているが，これは周囲が気になって落ちつけない，いわゆる集団生活に不慣れのためなのか，あるいは，自主性の欠如ということなのか，これについてはもっと詳細な調査でないと判明しない。最後はテレビの影影であるが，これはわずか0.7％である。テレビのために読書が阻害されているとよく言われるが，すでに，生活時間のすごし方その他の項でもふれたように，この学校の場合，テレビの影響は現われていない。

時間的な理由ではなく，読書が嫌いだからというものは6.4％である。他のものが読まない理由も，あるいは，不読者層の増加というのも，実は読書の意志はありなが

表12： 読書の阻害条件



この問については，ほとんどのものが，何らかの条件により，読書が阻害されていると回答している。そして，その理由として共通していることは，時間の不足ということである。

まず，第1は勉強が忙しい37.5％，第2はクラブ活動・趣味などのため忙しい23.3％となっている。これを学年別にみると，1，2年は勉強とクラブ活動のためというのがほぼ同数であるのに対して，3年は勉強のためというのが圧倒的に多い。第3は身辺整理・洗濯などで忙しいというもので，これは，問1の生活時間の過ごし方ら，読書ができないということになる。これは生活時間の使い方や環境整備などの諸条件を改善または解決することにより，ある程度の読書の時間を生み出すことが可能であろう。しかしながら，勉強が忙しくてという障害は，現代の教育のあり方を根本的に改革しなければ，解消されることは困難であろう。

おわりに

さて，以上8問にわたって，多少の私論を述べてきたのであるが，これが必ずしもまとを得ているとは思われ

ないし，また，はじめにも述べたように，この調査が直ちに一般の高校生にあてはまるとも思われない。ただ，何がしかの参考にでもなればと考えるのである。

この調査がはじめられた当初から，昭和44，45年ごろまでは，読書も比較的によくされてきているのであるが，45年後半，特に46年は急激に減少の傾向をみるようになってきた。ちようど44年から45年にかけて学生——高校生にも過激な学生運動が展開された。しかし，この間は本もよく読まれ利用された時期でもあった。おそらく，この当事者たちも，自分なりに悩み，苦しみ，読書にその解決の方法を求めたのであろうか。しかし，それも決して彼らの満足を与えたものではなかったろうし，あるいは，極度の緊張の連続からの解放感からか，46年になって，読書量減少の傾向が著しくみられるようになったのであろう。

この調査において，全般的には読書量が低下し，また不読者層の増加という現象が現われているが，しかし，彼らは決して読書を軽視しているのではない。むしろ，読書の必要性を痛感し，それに多大な期待をかけているように思われるのであるが，彼らの年代が，あるいは生育の環境が却って彼らの内的欲求とは逆に，あえて読書を無視してゆくような結果になったものと思われる。しかし，これはいつまでも続くものではなく，適切な指導によって，何れ解決される問題であろう。ともかく，高校生の読書はむずかしい問題をかかえている。これは単に，読書傾向や読書指導の問題としてではなく，社会や教育の問題として捉え，その指導方法や対策を考えてみることが大切であろうと思われるのである。

注1　「学校図書館」 №269，全国学校図書館協議会 昭48・3　P.35

注2　「読書世論調査」　毎日新聞社　1970　昭45　P.116

注3　「読書調査」　№3，東京都立秋川高等学校 1968，P.8

SUMMARY

Reports a survey of 1) reading interests of senior high school students, 2) their consciousness of the necessity of reading. Questionnaires were collected during the last five years at a boarding senior high school in Tokyo. Of 3,250 participants 93% responded. Results were as follows:

1) 96% answered that, besides textbooks, they read daily either books, magazines or newspapers during their free hours. The minimum time allotted to reading as a whole was 15 minutes, the maximum more than 3 hours, and the average 53 minutes daily per person. Since an average of 47 minutes was spent in listening to the radio or watching TV, it appears that these students were more interested in reading books than in radio or TV programs.
2) The amount of reading (newspapers and magazines excluded) was 3.1 books a month per person. The yearly average during the past five years has been on the decline: 4.1 books in 1967, 3.6 in 1968, 3.2 in 1969, 2.6 in 1970, and 1.8 books in 1971.
3) Different media fulfilled different needs: newspapers for current information (56%), magazines for tastes and hobbies (42%), radio broadcasts for amusements (48.5%), and books for culture and studies (71.4%).
4) "The Dr. Manbou Series" (by Morio Kita), "A Farewell to Arms" and "Kokoro" were the three most favored books, in order of popularity, the first probably because it appeals to modern attitudes, the two others because of their long established good reputation.

5) In the poll for the most popular writers, Soseki Natsume ranked top. His personality and his unwavering reputation attract more readers than those of contemporary writers.

6) Reasons given for choosing particular books were:-

   (a) Browsing led them to examine them. Then they were found to be good books (27%).

   (b) The authors or titles were attractive.

   (c) The books were recommended.

   The greater the accessibility of the books, the more chances the books have of being chosen.

7) Approximately 50% of students read their own books, and 35% read borrowed books.

8) Most students agreed that there are difficulties in forming good reading habits. Shortage of time is the main cause because, according to 37.5% of students, most of their time is taken up by preparatory studies for their lessons. 23.3% mentioned club activities as time-consuming. 10th and 11th grade students gave "studies" and "club activities" as reasons, and 12th grade students gave, almost unanimously, "studies".

Although the amount of reading has declined, this was not because students regarded reading as unimportant. On the contrary, they ewre keenly aware of the necessity of reading and expected much from it. Their home backgrounds and social environments seem to conflict with this inner desire, depriving them in effect, of opportunities to read. Therefore, the formation of good readers' interests depends on action by society as a whole. Reading guidance and the means to solve the problem should not be sought only in the libraries. It should be considered on a wider scale.

漫画の文法とその読みのモデル*

立正女子学園短期大学
阪　本　一　郎**

1　はしがき

むかし，文字が発達する前には，絵画でコミュニケーションが行われた時代がある。絵画といっても素朴な略画で，岩などに刻みつけられたものが，しばしば発掘されている。その後，象形文字が考案され，次第に音表文字が用いられるようになったことは，文字の発達の常識である。こんなことを言い出したのは，現代は，絵画を読む時代がふたたび訪れたことを言いたいからである。これは，上記の知覚像（image)→象徴（symbol)→記号（sign）の文字の発達の順序を，大げさに言えば逆転させることになる。

一例をあげる。明治の末から大正の初めにかけて(1900～1920年頃）流行した「判じ絵」という遊びがあった。たとえば図1のような絵と文字の系列を示して，これを「はちすばの濁りにしまぬこころもて何かは露を玉とあざむく」と読ませるのである。(4) このように知覚像と文字とを混用し，しかも点線で表わした所は読まなかったり，さかさになっている絵や字は逆に読んだり，濁点やマイナスの符号のあるところはこれに従ったりするルールで読ませるのである。これに頓知を雑えて「代せ」を「酒代よこせ」と読ませるなどのくふうが，当時はやったものである。

この「判じ絵」は，1780年代の「めくらごよみ」までさかのぼることができる。文字を知らない農民に季節を教えるために考案された絵暦で，岩手県の旧南部領で用いられたものが現存している。そこでは例えば，ケシの絵に濁点を打って夏至，塔とジ（琴の糸を支える駒）を組み合わせて冬至，鉢・重箱・鉢・矢を描いて八十八夜などを読ませている。また南部領では経文を判じ絵で図解したものも残っている。あるいはもっと古くから，うちわや着物の染めなどに，この思い付きが行われていただろうと推察される。

図1　判じ絵の一例

とにかく，絵を文字のように読むのである。しかしこ

---

* Grammer and reading model of comics.

** SAKAMOTO, Ichiro (Rissho Gakuen Women's Junior College)

のことは，漫画の世界では，普通に行われるようになってきた。多少事情が異なるけれども。

Ⅱ　読画時代

もともと絵画は独立の芸術として発達してきた。しかし絵画も文字も書かれることは共通しており，この点で，古くから相補い合う関係が存していた。「絵巻物」は10世紀以前にさかのぼれるようだが，これは1段落の詞書（ことばがき）とその内容を描写した絵画とを交互に配して，説話を進行させるようにしたものである。また「絵草紙」や古典的「絵本」（『絵本太閤記』など）も，絵を見ながら文章を読み，文章によって描写されているところを絵によって確め，文章の描写していないところを絵によってそのイメージを補うように考案されたものである。絵と文章とは並行するのであった。もつとも例外はあった。

ところが「さし絵」（挿画）となると，文章が主で，絵画は従の関係におかれた。つまり，さし絵は一方的に文章の意味を増補拡充するために文章に添えるものであった。これを広義に解すれば，文意とは直接の関係がなく，ただ装飾のために添える場合もあった。このさし絵が，近来は殖えつつある。おそらくこれは現代の視聴覚の重視もさることながら，日本に独特の新聞小説の連載が，明治の初期に始まったこととも関係がありそうである。近代文学を育ててきた文豪のすべては，どの時期にか，新聞の連載小説を書かなかった人はない。そして新聞は誰を起用するかによって，読者の増減がいちじるしく左右されたのである。それは1回の分量が1,200字の程度で，それに毎回1枚ずつのさし絵が添えてあった。これを読者の大衆は愛読し，熱狂し，次第に習慣化されてきたのであろう。そして，作家自身も描写のある部分はさし絵のほうに譲って，文章では表現しないという傾向が出てきたようである。(6)

絵草紙の中から幼童むきの「赤本」が派生してきたのは延宝ごろ（17世紀後半）である。しかしまだ文字の読める者が少なかったし，この種の草紙は印刷費が高かったので，庶民のものにはならなかっただろうと思われる。

明治5年（1872）に学制が敷かれてからも，教科書は検定制であり，初期にはさし絵のないものも用いられていた。教科書が国定になったのは明治37年（1904）からで，その頃にはさし絵がかなり多く用いられていた。さらに巌谷小波の『お伽画帖（おとぎがちよう）』（小形25冊）が刊行されたのは明治41年（1908）で，これは現代的な子どもむけの絵本の最初のものであった。

これと並行して日本で最初の少年雑誌『少年園』が発行されはじめたのが明治21年（1888），その翌年には『日本之少年』が刊行されている。後者は明治28年に『少年世界』となる。これには西洋ポンチが掲載されているがそれらを見ても，また当時のおとなむけのポンチ専門雑誌を見ても，絵と文章とは結合されてはいない。当時の絵と文章の提供形式には次の3種類あることが見られる。

(1)　さし絵形式――絵と文章とがそれぞれ独立していて同じ情景を並行的に描写した。

　ただし，文章は状況の推移を比較的緻密に描写してあるが，絵はその推移の中から特徴のある部分を選んで描写している関係上，絵にその主題を文字で書き添えてある場合もある。

(2)　コメント形式――絵の意味をいつそうよく理解させるために，「見立て」や解説の文字を画面に書きこんだり，文章を別に添えてあるもの。

(3)　セリフ形式――絵の人物の発言したセリフを文字で書き添えてあるもの。人物が二人以上ある場合は，それぞれのセリフに発言者の名前を書き添えてあるか，その発言者の絵の近くに書いてあるかである。

その後，漫画が「続き物」として物語性を持つようになってからは，「マンダラ絵形式」を経て，「サイレント形式」と「吹き出し形式」とに分かれて発達してきている。

マンダラは仏教で用いられる用語であるが，ここでは観念的に同時もしくは連続しているものは同じ画面に描

写する技法を意味する。たとえば，ある事件をある人物がその場にいあわせないで知っていたとする時，その事件の生起した場面とともに，その人物が目撃していたかのように一画面の内に描写する形式。あるいは同一人物を一つの画面に二度以上登場させて，連続した事件を描写する形式。初期の漫画は枠の中に描かなかったから，そんな絵が相当多いのである。

「サイレント形式」は，初期には西洋ポンチに見られるだけであったが，原則として文字を伴わず，絵のみで物語を理解させ笑いに誘うもので，たいていのポンチ絵には「セリフ形式」を併用していた。後にはこのセリフの要点を短くした句（phrase）を主題（caption）として冒頭に掲げるものが多くなった。

また「吹き出し形式」は，風船玉のような「吹き出し」（balloon）を発言者の口のあたりからセリフを書きこんで示し，絵とセリフの結合を図るものである。

ところが私は明治末期のおもちゃ屋で売られていたと思われる絵本の中に，この「吹き出し形式」があるのを見付けた。その絵本は『動物ポンチ』という木版色刷で，「牧金発行」と表紙に見えるが，奥付ははずして綴じなおしてあるので書誌の詳細はわからない。わかっても，この種の筆者は当時は匿名であった。半紙半截判，表紙とも20ページで，中味は各1ページごとに1～4コマの動物を主人公に見立てたポンチ絵が載せてある。その中の1ページが「吹き出し」を使って，絵とセリフの結合を図っているのである。その他のページは，コメント形式とセリフ形式とを用いている。

別におとなむきの漫画を見ると，阪本繁二郎が『東京パック』に発表した作品に「吹き出し」を使っている例が発見される。『旧正月』『車夫気質』等で明治43年（1910）の作品である。前者は紋付袴の男が農家の庭先に来て“あけましておめでとう”と挨拶をし，〆飾りの軒下で主婦が腰をかがめて“いいお正月でございます”とことばを返している図。それに『旧正月』とキャプションを付けている所に，新暦の正月では農事が終わらないという風刺がある。後者は，人力車から降り立った芸

図2　『動物ポンチ』における吹き出しの使用例

者を連れた旦那が“ご苦労さん”と車賃を払うと，車夫は“へえ，どうもありがとう存じます。たくさんのお祝儀までいただいて相すみません”“苦労した方はよくわかっていらっしゃる。こうゆう旦那はめったにない”。次のコマでは車夫二人が車を引いて立ち去りながら，“あいつだよ，親兄弟をはだかにして，うぬぼかりごう遊をしていやあがる。それ評判の……”“うーんあいつか，あの名うての極道めは”と噂している図。このセリフのところは吹き出しを用いてあるが，文字はまだ手書きのままで活字になってはいない。

これだけの資料で「吹き出し」の工夫を始めて考案した者を捜すことはできないが，まず，明治の末期にはこんな工夫があったと推定することはできると思う。

大正6年（1917）の『日本少年』の「少年ポンチ」特集号には，全然「吹き出し」が用いられておらず，岡本一平および門下の宮尾しげをは徹底的に「さし絵形式」

を守り，北沢楽天は「コメント形式」と「セリフ形式」とを用いた。その楽天も後に『とんだはね子嬢』（昭和3年，1928）では「吹き出し形式」を用いている。

『朝日グラフ』にジョージ・マクマナスの『親爺教育』が紹介されたのが大正11年（1922）であり，『時事新報』に F.オッパーの『ハピー・フリガン』が紹介されたのが大正14年（1925）であるが，これらはみな「吹き出し形式」を採用していた。これらをまねて『正ちゃんの冒険』（大正12年，1923）は「吹き出し形式」と「コメント形式」とを併用し，『ズク小僧一代記』（大正14年，1925）は「コメント形式」で貫いた。わずかに長崎抜夫が『ピー坊物語』（大正12年，1923）で，麻生豊が『ノンキナトウサン』（大正13年，1924）で「吹き出し形式」に徹した。このように大正時代は「さし絵形式」から「吹き出し形式」への移行期に当たるのである。

この事情から見ると，「吹き出し形式」は西洋に始まったようである。だが 1841 年にロンドンで創刊された『パンチ』の過去の傑作集[8]を見ると，1,000 作品のうち 2 作品だけに「吹き出し」が使ってあるだけで，それも1924年と1931年の作品とある。これらの中には一枚物が多く，中には続き物もあるが，「吹き出し」を用いてあるのはともに続き物である。初期の一枚物は画面の外にセリフが活字で印刷してあって，登場人物のセリフのやり取りが人物の名前を冠して書いてあり，中にはこれらを総括する抽象的なコトバが印刷してある場合もある。したがって読み手はこのキャプションを読み，セリフのやり取りを読み，絵を見て確かめたものであろうから，やはり「さし絵形式」だったようである。この 2 点のほかの続き物は，「セリフ形式」かあるいは「コメント形式」かであって，いずれも画面の外に活字で印刷してある。

だから初期の作品は相当長い文章が付いているが，20世紀にはいるころには，文章が短くなり，ついにはセリフの一部分が，不完全な文章でキャプションとして用いられている。

ちなみにキャプションのみを有するサイレントの漫画は1920年の作品が初出で，1946年から数点を数え，次第にその比率を増して1954年には延べ19点に昇っている。これは正に絵を読む時代の到来を思わせる。

これから推すと，「吹き出し形式」は続き物がこれを必要としたことに始まると言えよう。一枚物にもセリフがキャプションとして必要だとすれば，続き物にはなおさらのことである。しかも西洋では画面の中に取り入れられなかったセリフが，画面の中に取り入れられ，絵を見るのと同様に発言者がわかり，その発言のときの表情やしぐさも，そして相手の反応の仕方も同時にわかるという直観性を持っているのである。

S.ホフによれば「続き物（comic strips）は1896年頃にアウトコールトの『The Yellow Kid』に始まった。新聞紙の発行部数の競争の結果として，この連載の成功は急速に他紙の模倣に導いた。1900年代の初期には……」と言ってオッパーの『Happy Hooligan』，フィッシャーの『Mutt and Jeff』，スターレットの『Polly and Her Pals』，マクマナスの『Bringing Up Father』などの他に 7 点を挙げている。また「1920年代の中頃には」と，8 点をあげ，「漫画の黄金時代が来た」とて19点をあげている。[2] この新聞連載漫画の全盛が，この「吹き出し形式」を支えて来たらしい。わが国でも昭和時代にはいると「吹き出し」を使わない続き物は数えるほどしかなくなった。

そこへもって来て，戦後（1945～）には「劇画」と称する続き物が現われた。これはやはりアメリカの新聞紙・漫画専門誌などの戦時中の探偵物・恐怖物・超人ものなどの脱ユーモア物の流行に刺激されて，手塚治虫らが冒険物や感傷物を書きはじめたことによる。その後，紙芝居画家だった山川惣治らや，貸本専門画家だった白土三平らが同じ形式で描くようになって，「漫画」と称するのは不適当と感ずるようになってきた。そこで，「劇画」とよびかえることになったが，その特色は(1)性愛・勝負事・犯罪・恐怖などの原始的興味を主題とし，(2)画面にムードを盛り（例えば，リアルな密画をワイド版で挿入したり，音のない画に「シーン」と書き入れたりするなど）(3)ユーモアを追放し，(4)危機的場面を映画的手

法で追求し，そして，(5)ヤング層を対象とするなどである。

このようにして，少くとも25歳以下の者たちには，劇画を読む時代が来ているのである。それとともに，描画の技法も進んで，漫画的表現の文法ともいうべきものが発達してきている。例えば歩行を表わす土ぼこり，急速な位置の変動を表わす飛跡，風を表わす風跡，視線を表わす点線，震動を表わす波状線，回転を表わす弧線，撃突を表わす放射線と星，変化の過程を表わす写真を重ね焼にしたように描く法，驚きを表わす跳躍，吹き出しの中に意中の事物や状況を描く方法など，それに加えて，「ドカン」「キューン」「パシッ」などの擬声・擬態音を書き入れる方法など，いずれも漫画的描写の独特の文法である。この文法を知らなければ，充分に漫画や劇画を読解することはできないのである。

さりながら私はこの趨勢を肯定し，読画は読書に取つて代わるべきものだと言うつもりはない。文字等の記号には表現機能の限界がないが，絵画には具象化しなければならぬという制約がある。この制約を越えて，具象を通して観念的・抽象的な世界を描写しようとすれば，それは「吹き出し」を使って，間接の方法によるよりほかはない。劇や映画はセリフによって物語を進めているし，ナレーションを併用しているものもあって，りっぱな芸術作品として通ってもいる。この手法をまねた漫画や劇画も出まわっている。絵画だけで表現していた時代は過ぎて「吹き出し」やナレーションを使いこなしている今日では，漫画や劇画を読む時代になっていると思うのである。だが，これによって文字だけを読むことの重要さはいささかも減少するものではない。

Ⅲ　漫画の読みの過程

では漫画や劇画の読みは，どんな過程をたどるのかを考察しよう。

漢詩には古来「起・承・転・結」というレトリックがある。この説明には頼山陽の『糸屋の娘』がしばしば援用される。

大阪本町糸屋の娘（起）
姉が十六妹が十四（承）
諸国諸大名は弓矢で殺す（転）
糸屋の娘は目で殺す（結）

これに対して岡本一平は漫画では「起・承・山・結」と言いかえるべきだと言っている。「連続漫画での三番目の画面は事件の最発展，興味の充実点を描きます。ですから山です。連続漫画を一見してこの山の場面の面白いか面白くないかで全体の価値が決まりますから最も力を注がねばならぬ場面です。」だから一連の事件を描こうと決めたら，第三の「山」の部分から書き始め，次に「承」を，次に「起」をと逆に進み，そして最後に「結」をという順に書くことを勧めている。(5)

しかし戦後の漫画家の作品を見ると，第四の「結」の部分にユーモラス・ポイントを置く傾向が多くなっている。これは落語の「落ち」に似ている。落語では「落ち」をしゃべるとすぐ口をつぐんで，あとは何もしゃべらない。聞き手をつっぱねる。そこに聞き手がユーモアを感得する一瞬の自由を残す。この落語の手法と似てきているようである。例えば横山隆一の『フクちゃん』では，第四のコマにユーモラス・ポイントを置いてあるのが約58%，長谷川町子の『サザエさん』の作品では約66%もある。ただし『フクちゃん』では第三コマに38%のユーモラス・ポイントを置き，しかも「転・結」の手法で行っているのに対して，『サザエさん』は21%を第三コマに置き，しかも「山・落」の技法を取っている。なおついでに第二コマにユーモラス・ポイントを置いているのが，『フクちゃん』に3%，『サザエさん』に11%もある。（共に見本抽出法による。）これらの判断には主観が混っていることは避けられないが，いずれにしても概ね現代の漫画は「起・承・山・落」になっていると思われる。

さて以上は，漫画製作上のレトリックであった。今度は，漫画を読む側に立って，その過程を分析してみよう。

この場合，J.M.サルズの『笑話と漫画の理解の二段

階モデル：情報過程分析』[7]は，たいへん参考になる。次にしるすのは大体それに拠っているが劇画については私見を加え，全体として多少修正してある。

これを，一般的なモデルで示すと，図3のようになるであろう。

まず「新経験の期待」，が読み始めの動機となる。ところでとくに漫画が読みの対象として選ばれるのは，それが物語を漫画的手法で伝達していて，直観的に理解され，平易であることが予想されるからである。

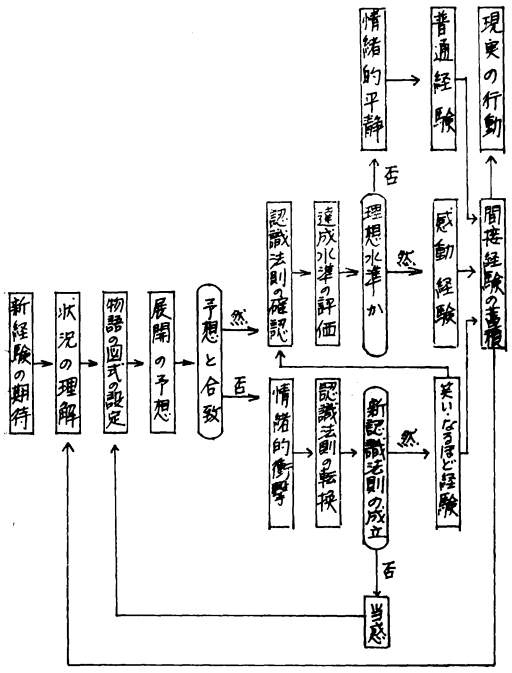


図3　漫画の読みのモデル

次いで「状況の理解」に進む。キャプションがあればそれを読み，登場人物とそのセリフから各自の性格・意図などを察知し，その人物の置かれている事件上の位置・環境などを捕捉し，彼の人間関係・社会的立場などを理解し，その主たる行動の目標あるいは行動を阻止する障壁の布置を考察するなど，与えられた情報をできるかぎり収集して，その理解につとめる。

さてそこで「物語の図式の設定」の生産的作業の過程に進む。この段階では，これまでに収集し理解した情報を用いて，物語の図式（schema）を新たに構成するのである。物語の要因のあいだにはすでに相互関連すなわち構造があるものとして理解されるが，その既存の構造と，現に読んで理解された構造とはかならずしも符合しない。そこに，新経験の魅力がある。そこで既存の構造と，新しく知覚された構造とを重ねあわせることによって，その差異を修正し，既存の内部情報はなるべく知覚情報に近付けるようにして，物語の筋立てを試みるのである。

したがってこの過程では，記憶している情報が中心になる。しかし同じ状況に置かれた経験のない者は，想像あるいは推理によってこれを補うこともある。そして，なんらかの価値判断に導かれるものである。すなわち論理性，倫理性，審美性，宗教性などの価値が問われ，価値の高いほうには快，価値の低いほうには不快の情緒が伴う。こうして快の方向に設定された物語の図式は真・善・美・聖などの情操を伴い，不快の方向に設定された物語の図式には，偽・悪・醜・俗などの情操を伴う。

ところでこのような状態は，物語の最後まで続くのである。というのは，話根ごとに一喜一憂を重ねつつも，物語は完結しないから，その読み進めた時点までの情報をとりまとめて，一連の物語の図式が，未完結のまま設定されつづけるのである。またそこには表現されてなくても，今までに直接もしくは間接に経験した，これらと関係のある知的・情意的情報が総動員されるのである。そしてこの物語の「展開の予想」が成り立つ。

かくて「予想と合致」したかどうかが問われる。そこからは二つの過程に分岐する。一方は主として脱ユーモア物のコースで，他方はユーモア物および謎解き物のコースである。

脱ユーモア物のコースは，物語の予想が与えられた漫画に的中した場合の過程で，次に「認識法則の確認」に進む。その状況のもとで，そうした事件が生起すると思考した認識法則が間違ではなかったと判断する過程である。当然起こるべき事が起こったと判断するのである。そこで「達成水準の評価」に進む。ここでは前に述べた

真と偽・善と悪・美と醜・聖と俗などの葛藤において，いかなる水準がどんな程度に達成されたかを評価するのである。

そして，それが「理想水準か」どうかが問われる。この際には，この程度なら自分もできるという自信水準と対照されるのである。理想水準はそれよりも高いのが普通である。もし物語の結果がその理想水準に近く到達している場合には，自己否定の肯定を知った驚きと喜びのショックが生ずる。これが「感動経験」である。(6. b) しかし自信水準よりも低い水準のことが達成したことを物語で読むと，「情緒的に平静」で，感動は起こらない。また理想水準よりもはるかに高い達成水準の物語を与えられると，その真実性に疑を抱き，どうせ漫画だから虚構がひどすぎると思わせる。したがって感動は起こらない。

一体，漫画に感動するとは，とんでもないことのように思われるが，私の別の調査 (6. b) で感動した書物をあげさせたところ，小学校4年までには，普通の読物と並んで漫画がどの学年でも男児の3分の1，女児の4分の1はこれをあげていた。それが5年生になると，ぱったりと無くなっていた。しかしそれは劇画のない頃であつて，今ならもっと多く上学年まで漫画をあげるようになっていると思われる。

次に脱ユーモア物の例をあげよう。以下は平田弘史の劇画『首代引受人』[10] の第一話の荒筋である。

(1) 菅笠に草鞋ばき，袴の腰に大小を差した屈強な中年の男と，前髪の若者が帰宅する門前で出あう。男は深沢強右衛門の使いの者と名乗り，若者の父坂部兵部の首代をもらいに来たとて，父がしたためた百両の手形を見せる。若者は武士の鑑と言われている父を信じて，追い帰す。（33コマ）

(2) 食膳に対座した父に，その事を報告すると，父はさりげなくふるまうので，息子は疑ったことを詫びる。（11コマ）

(3) 父親の回想——十余年前の大阪夏の陣の折，危機にひんした父が，子どもを助けたさに百両の手形をしたためる。（11コマ）

(4) 父は使いの者に手紙を持たせてやる。そしてこれは呼び出し状で，人目につかぬ所で斬ると言う。息子は手並を見たいと言うが，留守居を命じる。だが父に気付かれぬように後を追う。（25コマ）

(5) 父はある屋敷の門をくぐり，そこの主に不足分 20 両を借りる。主は慰めるが，坂部兵部は武士の鑑の虚像は重荷になって来たとぐちをこぼす。しかし子どもをりっぱに育てたことに満足している。（23コマ）

(6) 父は受取人に会い，何事もなく取引は済んだ。これを見ていた息子は激怒し，父に腹を切れと迫る。（36コマ）

(7) 父は切腹の決心をし，息子に介錯を頼む。しかしもがき苦しんでいる父を見ても，長い間自分を欺いてきた息子には，それが当然の報いと介錯をしない。見かねていた受取人が首をはね，「あえて押し通さねばならなかったその虚像の中に，子を想う父御殿の心中，誰に察してもらいたかったであろうな。」と言って立ち去る。（36コマ）（計30ページ）

この作品の発端(1)と(2)の話根では，登場人物が父と子と首代受取人の3人で，父は城中では武士の鑑として尊敬されている人物，息子はそれを信じている純情な青年であり，受取人は百両の手形を持って父に面会を求めている謎の男であることが理解される。こころが(3)で手形を書いたのは事実であったこと，それも息子を育てるための一心であったことが理解されると，父親は息子に知られないようにどう切り抜けるかの懸念（サスペンス）がわいてくる。(4)ではさっそく解決の策が示され読者の予想と対照される。しかし留守を命じた父親に疑点が残り，それを確めようとする息子に共感が生まれる。しかるに(5)では逆転して受取人に支払う金が用意され，虚像の維持に疲れたと父親の口から聞かされる。そこで実際には金で解決する積りだとわかり，また読者の予想と対照される。しかし後をつけている青年がどう反応するかのサスペンスが後を引く。

(6)では青年の怒が爆発する。この予想は読者が抱いたものと合致し，それは日頃の言動と一致しない父親と知った怒であったと認識法則が確認される。そこで切腹を迫る息子の態度が評価される。次いで(7)では，頼まれた介錯をさえしない息子の態度に感動が持たれる。このあたりが山（クライマクス）である。しかし理想水準の持

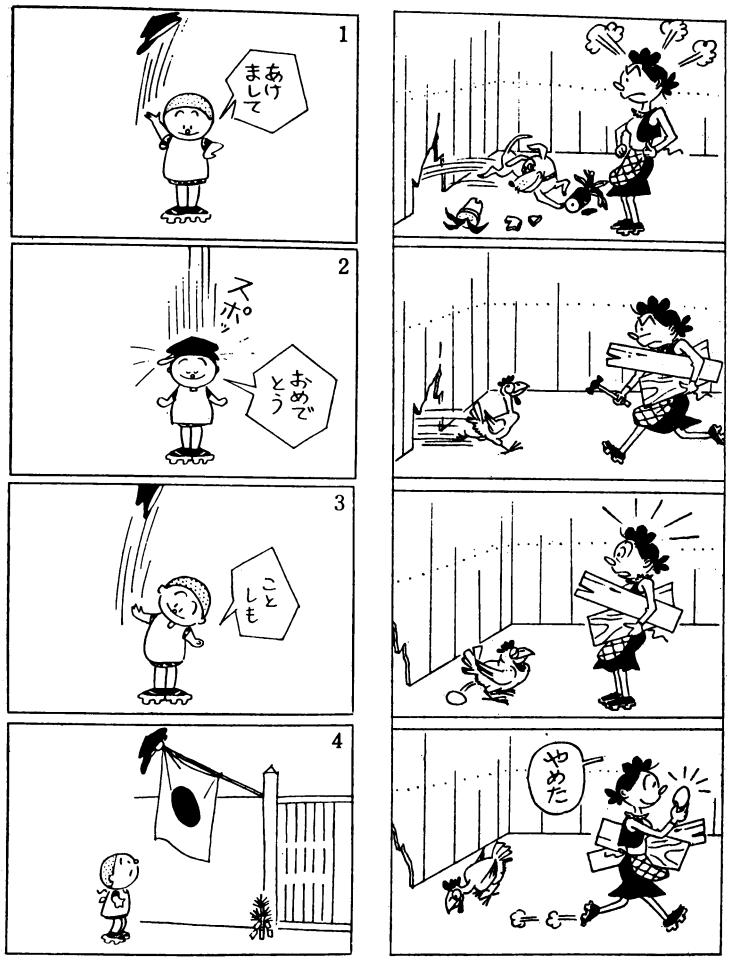


図 4 『フクチャン』と『サザエさん』の作品例

ち方でこれに感動しない読者もあるであろう。

もう一つのコースは，ユーモア物および謎解き物で，物語の予想が的中しなかった場合である。ここで例証として漫画の実例を見ていただこう。左図は『フクちゃん』の一作品(9. b)，右図は『サザエさん』の一作品で，どちらも作品集の4コマ物を借りた。

『フクちゃん』の例では，「あけまして」と帽子をほうりあげて，「スポッ」と頭の上に落ちてきてかぶさり，「おめでとう」と続く。こんどは「ことしも」と，またほうりあげると期待に反して，落ちてはこない。だから「どうぞよろしく」と続かない。けれども，始めからふざけた挨拶の仕方だし，帽子の落ちてこないことも理にかなっているので，新しい認識法則を適用することで笑いが起こるのである。

『サザエさん』では，第1コマは隣家の犬が垣根の破れた所を潜つてはいつて来て植木鉢をころがしているのを見付けて腹を立てる。第2コマでは怒った彼女が通路を塞ごろとするが，そこへまた鶏がはいつて来る。ところが第3コマでは鶏が卵を産み，彼女はびつくりする。そこで第4コマでは「認識法則の転換」が生じ「新認識法則が成立」したために笑いが起こるのである。

私が試みに『フクちゃん』(9. b)『サザエさん』(1)それにサイレント漫画の根元進の『クリちゃん』(3)の3冊から，最初の50作品ずつをとって，各々の情緒的ショックの種類を分析してみたのによると（これも主観に流れるおそれがあるけれども）意外（偶然）感がもっとも多くて35％もある。前に引用した2作品も，両者とも意外感によっている。次に多いのが異質感（18％）で，これまで相手にしてきた者が，同質ではない者，つまり人違いであったことがわかる場合などである。これも意外感にはいらないことはないので，合わせると意外感によるショックは過半数を占めるのである。

次に不安感と自己感とがともに9％を占める。前者は危険感や恐怖感をふくみ，それらからの脱出を図ろうとする行動が伴う。後者は自己満足あるいは得意，独善的行為におちいっている場合である

次に多いのが，期待感（8％）と悪戯感（7％）となっている。前者はある目標を持ち，それに向かって近付こうとする努力をふくむ行動に伴い，後者はいたずらを

したり，嘘をついたりして，その結果がどうなるかを見ようとする行為に伴う。

ほかに羞恥感（5％），類似感（5％），立腹感（3％）などがある。羞恥感は，自分の秘密にしておきたいこと，例えば，自分の不作法を暴露したくない感情のショックを，類似感は類を以て集まった者たちの間で同情し合っている場合，そして立腹感は，困難な課題に当面して怒りを感じているなどの場合である。

およそ以上の9種類に分けられる。いずれも常識的な正常な結末ではなく，逆転した結末が与えられ，それがショックになるのである。ここで，そんなことはありえない，それは虚構だと思う読者は，漫画を読む資格がない。

とかく一筋の論理に執着し，自分の予想のほかに真実はないと考える抵抗性の強い者には漫画はわからない。漫画を楽しめる者は，自我の領域が流動性に富み，開かれたパースナリティを持っている者に限られる。このショックを受けて，もう一度考え直してみる寛大さを持っている者に限られる。

そこで「認識法則の転換」の段階に進む。今までの予想を立てた認識法則を一旦離れて，別の角度から，与えられた結果を真実と受けとめるような新しい認識法則を発見しようと努めるのである。

前掲の統計によると，もっとも多いのが合理性の法則（34％）である。前に引用した作品の『フクちゃん』はその好例で，この効果を高めるために作者は最後のコマで始めて旗竿を描いていく，帽子が落ちてこないのは当然だと判らせている。

次に多いのが，失敗性の法則（32％）である。予期した結末が得られず，努力のかいもなく失敗を喫した，徒労におわった，あてがはずれた，誤認から出発していた，秘密にしようとしたことがばれてしまったというような結果で納得する場合の笑いである。

次が矛盾性（17％）である。話の結末が矛盾をはらんでいても，主人公はそれに気付かなかったり，あるいは底抜けの善意を示してその矛盾に耐えている場合，そこに笑いが誘発される。

次が稚拙性（10％）である。これは主役に幼児がまじっている作品ばかりを採ったので偏りがあるかもしれないが，幼稚な心性から出た拙劣な行動を承認する場合の笑いである。

次が模倣性（6％）である。つい釣りこまれて，真似をしてしまったという場合の笑いである。

なおほかに風刺性（1％）がある。これは子ども漫画を選んだので％は少いが，おとなむけの漫画には相当多く，また横山の作品の末期や，長谷川の近頃の作品にはしばしば見受けられるものである。これは社会や人の過失・欠陥・罪悪などをからかい，非難し，警告するものであるが，その作品が何を風刺しているかの社会的知識のとぼしい子どもには理解できない。

以上，認識法則には6種類ほどあるようである。この新しい認識法則が成立し，これに切り替えられるとき，「笑い」が誘発される。しかしそれが成立しないときには，「当惑」する。もし依然として可笑性を追求することを続けるならば，「物語の図式の設定」あたりに戻って，読み直すことになるであろう。

このように，物語の結末の予想が否定され，情緒的なショックによって，認識法則を転換することが要請され，その成立が可能となったときに，笑いが起こるのである。笑いはショックからの急激な解放に伴う現象である。

また例をあげないが，謎解き物――たとえば推理物・忍者物・怪奇物などでは，予想と合致しないために不思議感や神秘感などの「情緒的ショック」が先に来るが，あとで謎を解きあかされ，新認識法則が成立すると，「なるほど経験」に至る。これは急に見通しが立った知的な喜びの状態で，「笑い」に近い。

そんな場合には，別のコースの「認識法則の確認」に続き，感動につながることもある。

あくまでこれは説明のためのモデルであって，この順に継時的に相次いで生起するとは限らない。むしろこの順に重なり合って，ほとんど同時に生起するものなので

ある。

Ⅳ 要約・結論

1 文字と絵とが融合して提供されている場合には，次のような形式が見られる。(1)さし絵形式，(2)コメント形式，(3)セリフ形式。その後(4)マンダラ絵形式を経て，現在では(5)キャプションを持ったサイレント形式と(6)吹き出し形式とが派生し昭和期以後は(5)と(6)とが漫画の主流になっている

2 それとともに漫画の表現に独特の文法が工夫されてきている。また漫画表現のレトリックとして「起・承・転・結」という漢詩の技法が用いられているが，実際に調査してみると「起・承・山・落・」の技法に傾いている。これは落語の影響であろう。

3 そこで漫画を読む過程を分析すると，図3のようなモデルが考えられる。この過程では「新経験の期待」に始まって「状況の理解」「物語の図式の設定」「展開の予想」と続き，「予想と合致」するか否かによって二つのコースに分かれる。一つは脱ユーモア物のコースで，「認識法則の確認」「達成水準の評価」と進み「理想水準か」否かが問われる。そして「感動経験」か「普通経験」に分流する。その二はユーモア物もしくは謎解き物のコースで，「情緒的衝撃」「認識法則の転換」と進み，「新認識法則の成立」するか否かが問われる。もし成立すれば「笑いの経験」もしくは「なるほど経験」となり成立しなければ「当惑」してフィード・バックが起こる。これらの経験は「蓄積」されて，現実の「行動」および他の物語を読むときの「状況の理解」あたりに利用される。

4 要するに文字を読むのと，漫画・劇画を読むのとでは，いずれもそれらから意味を生産し，操作することは同じであるから，一方は読むと言い，他方は見ると言って区別するのは適当ではない。ただし文字の場合は抽象的・観念的意味の生産・操作に適し，どちらかと言うと直観性に欠けるところがあるが，漫画や劇画は直観性においては文字に勝るけれども，抽象的・観念的意味のコミュニケーションには弱点を持っている。しかし「吹き出し」にセリフを盛りこめば，劇と同様の程度には抽象的なコミュニケーションも可能なのである。この故に，漫画や劇画をも読むと称したほうが適当であると思う。

参考文献

(1) 長谷川町子；よりぬきサザエさん，No.1；姉妹社，1967。

(2) Hoff, Syd ; *Learning to Cartoon* ; Stravon Educational Press, 1966.

(3) 根元進；クリちゃん，オレンジの本；さ・え・ら書房，1970.

(4) 日本少年，9巻9号；1914.

(5) 岡本一平；新しい漫画の描き方；先進社，1930.

(6.a) 阪本一郎；新読書論，マスコミ時代にいかに読むか；講談社，1959.

(6.b) 同上；読書による価値意識の育成（児童心理，No. 2）1964.

(7) Suls, J. M.;A Two-stage Model for the Appreciation of Jokes and Cartoon : An Information-Processing Analysis (*The Psychology of Humor*, Goldstein, J.H. & McGhee. P.E. (ed) ; Academic Press, 1972.

(8) Williams, R.E.(ed) ; *A Century of Punch*, London, Heinemann, 1956.

(9.a) 横山隆一；フクちゃん全集；講談社，1970.

(9.b) 同上　；フクちゃん，No.1；トッパン，1954.

(10) 平田弘史；首代引受人（漫画ベストセラー創刊号）1973.

実践記録

悪に陥る人間に対する許容に到る発達的特徴

——「五色のしか」の感想文にみる4・5年生からの報告*——

東京都港区立港南小学校

松　原　俊　一**

人は，ある時期には悪を悪として絶対視するときがあるが，またある時期がくればその悪を許容する心情が芽生える。このように人間の価値観は，概して時の経過とともに移り変わるものである。それは，人間の感情・思考や意識の発達と絶えず関係をもって，変化するものと思われる。

それでは，悪に陥る人間を許容するのは一体いつ頃から生じ，それはどのような発達的特徴を持つものであろうか。この研究は，小学校4・5年について，「五色のしか」の作品の感想文の指導のときに得られた資料をもとにして，この問題について考察したものである。

研究方法

1　教材　「五色のしか」（教出版4年下」

2　実施対象

東京都葛飾区立高砂小学校4年1組42名

東京都港区立港南小学校5年2組30名

3　実施日

小学校4年1組　昭和45年10月2日

小学校5年2組　昭和46年10月2日

4　調査方法

次のような質問紙を用い，教材の読後の意見を自由記述式によって求めた。

> 五色のしかのお話の中で，しかに助けられた男が，しかとの約束を破って王様に言いましたね。そのような男のことを，あなたはどう思いますか。自分の考えを書きなさい。

1.　4年生における発達的特徴

この質問に対して，4年生の意見は，次の四つの型に分類することができた。

A型　絶対的感情で五色のしかに関心を示したもの（3名）

五色のしかはかわいそうだと思う。友達が一ぴきもいないで体がきれいだから見つからないように山おくに住んでいて，ひとりで住んでいるからさみしいと思います。自分の命をかけた男に，ここにいるのをだまって！　とたのんだのに，命をかけた男にだまされて，ころされそうになってかわいうだと思う。

五色のしかがかわいそうだと言う見方，つまり，興味の関心は完全に鹿に向けられている。“友達が一ぴきもいない”“ひとりで住んでいるから”“自分の命をかけた男に”“たのんだのにだまされてころされそうになった”五色のしかはかわいそうだと言う。五色のしかの行為とその場の状態，条件にのみ関心が向けられていることに特性が見られる。そして，男への意識や関心はほとんどない。“命をかけた男にだまされた”とかすかに男の心情にふれているだけである。それも五色のしかの身びいきのために引き出したことであって，男を自分の意識

---

* Children's thoughts about the man who broke his promise in “The Five Colored Deer”.

** MATUBARA, Shunichi (Konan Primary School, Minato-ku, Tokyo)

下にとどめようとしているのではない。まして男の気持を推測したり，それを五色のしかの行為と対比させて考えようとする発想はない。五色のしかと，その立たされているいくつかの条件を絶対感情の投入によって，二者択一的に“かわいそう”とみる，自分の生活感情と未だ分離していない感情があるのみである。つまり，動物的自分自身という自己と対象とを同一化してかかる発想がみられる。

A′型 絶対感情によって男に関心を示すもの（3名）

五色のしかの話は，かわいそうだ。川でおぼれている男を助けて私がここにいることを言わないで，と言いました。男は，しかとやくそくをしました。男はやくそくをやぶりました。そしてしかがやられそうなとき，しかがなみだを流してわけを話したらゆるしてくれた。だから，あの男はにくらしい。

感情の流しかたは，A型と同じように絶対視的であり二者択一的である。“助けた男に約束をやぶられた。でも五色のしかは男を助けた。だから男がにくらしい……”と言うのである。前者はよくて，後者は悪いという二者択一的評価の視点しかここにはない。いいことはいい。悪いことは悪い。理屈も何もなく，その行為にのみ関心が集中し，そこにはたらく男と五色のしかとの感情の対応関係や相互の心情への関心は，まだ，働いていない。ただ現象的な行為についての批判と批難にのみに終る。興味の関心が男に変っただけであって，基本的な発想はA型と同様に，未だ自己の生活感情と分離していないべったりの感情の働きでしかない。

B型 対応関係によるとらえ（19名）

五色のしかはなさけ深くりこうなしかだ。なぜなら川で男がおぼれているのを見ると出ていって，あぶないこともわすれて男を助けてやって，王様が五色のしかをつかまえるときも，かくごをきめて王様の前へ出てわけを話したので命がたすかったから。

それにくらべて，五色のしかに助けられた男は，助けられたときはうれしくて場所をおしえないと言ったのに，“五色のしかを見つけたら金銀宝石をのぞみどおりあげる”というおふれに目がくらんで，おしえてしまったなんて，よくばりな男だと思う。

五色のしかと男との両方に興味関心を示していることが特徴的である。五色のしかについて述べていることの中で興味深いのは，“あぶないこともわすれて”“かくごをきめて……”と五色のしかの心情へと関心を向けていることである。そして，そのような五色のしかの心情と行為のかかわりあいについて考えながら，“なさけ深くりこうだ……”と評価している。

次に“それにくらべて……”と今度は男へと視点を転じ，その行為と心情について考えている。“うれしく……”“欲に目がくらんで……”などは男の心情をのぞこうとしているが，それがまだ“欲に目がくらんで……”という段階の発想で終ってしまっているのも特徴である。欲に目が眩んだのだから仕方がないと肯定化してみる発想ではなく，それは悪であり欲である。五色のしかへの関心が肯定であるなら，男への関心は否定でしかない。その肯定の申したてを対等に述べているところに，この型の特徴が見届けられる。つまり，肯定であった五色のしかへの関心と，否定した男への関心の叙述のつなぎを，“それに比べて……”とつなげ，対応から比較へとイメージを拡げている。これらの点において，さきのA型，B型との差異が認められる。

A型 A′型との比較の上から，このB型の特徴をさらに追求してみる。

五色のしかは山のふもとの大きな川で一人の男が川におちておぼれそうになったとき，出たら自分があぶないのに出ていったのだから，えらいと思った。

それで，この山に五しきのしかがいることをないしょにすると約束したのに金銀に目がくらんで約束をやぶったから男はずるいと思う。

この感想でみるように，A型，A′型のように単なる二者択一的，絶対的感情でもって，善悪の判断を決めていない。絶対評価型（A型 A′型）の要素は含んでいるが，その評価の仕方が A型A′型 のような行為の善悪という二者択一的視点に立っているというより，むしろ五色のしかと男の行為のかかわりあいかたの相対関係において考えようとしていることが，特に目につく。さらに，

あぶないのも忘れて助けた（しかの行為）

でも……↓　↑

約束を破りうら切った（男の行為）

だれにも言わないでほしい（しかの心情）

でも……↓　↑

金に目がくらんで王様に言った（男の心情）

といった対応の関係で，思考しいることが特徴としてとらえる。そしてその結果を，道徳的価値という秤にかけ，どちらに重みがかかるかということで，（この段階では，まだ五色のしかに加担する）善悪の評定をするのが，このB型である。

C型　自分と登場人物との対比によるとらえ（2名）

これまでの型は，登場人物即自分自身とでも言おうか，自分をべったりと物語の内容に密着させて考えている例であった。そしてそこでは，男かもしくは五色のしかのどちらかに関心を働かせているか，あるいはそれらの二者を対比関係にすえておいて，そこでの行為心情のからみあいの結果を善か悪かと判断していた。

しかし，このC型は，B型と同様に男と五色のしかとの対比のうえで考えているが，さらに自分そのものを物語の登場人物に対応させ，自分との比較の上で思考し感情を流している例である

五色のしかは自分の命をすてて人を助けたのに，五色のしかに助けられた人なんかは，しかの命をすてて自分がお金持ちになろうと考えていました。だから五色のしかの心と，五色のしかに助けられた男の心をくらべてみると，みにくい心とやさしい心のちがいのようなものがはっきりします。私がもしあのしかに助けられたらだれにも言わないと思う。だって命の恩人を殺すことになるんだもん。

前半は，B型と同様に，男と五色のしかとの行為などに関する対比論である。“……助けたのに……”“助けられた人なんかは……”などがそれである。そのあと“だから……くらべてみるといい心とわるい心のちがいがはっきりする……”と価値判断に至っている。そして，そのあと，“私がもし……”と自他の区別に入り，自分と男とを対比しつつ，五色のしかの行為に対する自分の考えを書いている。

しかしながら，自分との対比において捉えようとしていると言っても，この子のものの見方は，結局，道徳的に善は善，悪は悪という物差しできわめて素直に男の犯した行為を否定しきる見方でしかない。そこにはまだ罪を犯した男の立場や心情に立ち入って，人間の犯す悪もまたある場合には肯定しうると言う認識はない。

あと一人いたC型の子どもも，“もしも私がこの男だとしても，ぜったいにしやべったりしなかったと思います。”と男に対する否定観を述べている。

このように自分と登場人物とを対応させて考え，その結果，男の行為を道徳的価値判断に照合させて否定するのがこの型の特徴であると言える。

D型　相互感情の摂取による捉え方（2名）

この型を結論から報告するならば，これまでの型は，その質こそ違え，すべてが男の行為を否定する発想であった。そしてまた男の心情にまで深く入って，何故にそうなったのかについて理解しよとうすることでもなかった。しかし，次に報告しようとする資料は，それらとは異なって，男の行為，心情そのものにふれ，考えていこうとする発達段階を示す資料である。

ぼくはひとりの男の気持ちもわかると思う。ぼくだったらやはり男のようにすると思う。

五色のしかのこともわかる。ぼくが一人の男だつたらそうする。五色のしかだったら男をたすける。とてもおもしろかったけれど，ぼくはどちらの気持ちもわかる。

男と五色のしかとを対比させて考え，さらに自分と対応させているところまでは，これまでの型と同じである。ただその結果，“ひとりの男の気持もわかる，五色のしかの気持もわかる。自分だったらそうする”と述べているところに大きな異なりがある。ここで言う“わかる”とは，男の心にうごめく人間の善と悪との心の葛藤，そして五色のしかを助けようか，助けまいか，とその瞬間になってもなおためらいを起こす気持ち。それらを思いはかることができたと言うことであり，それが故に，男と五色のしかの両方の行為に対する肯定観が生ま

れたのであろう。

これまでの子どもたちの持った感情は，とかく善か悪かという絶対感情を投入させて考えるか（A型，A′型），それとも男と五色のしかの行為とそれにまつわる感情を対比関係において道徳的判断を下すか（B型），あるいは，自分との対応における二者関係の捉え方か（C型）のどれかでしかなかった。しかし，この段階では，それらと質を異にする人間感情の投入が考えられる。“男の気持ちもわかる，五色のしかの気もちもわかる……どちらの気持もわかる。”と，その子をして言い切れるのは，この子が人間相互の感情の摂取を理解し伴わせはじめたことである。“……どちらも，わかる”と同調などできると言うことも，感情の抑揚を知っているもののみが果たせるところであろう。充分に一つの発達段階として記憶してよいことであると思う

次の例は，いまふれた人間の相互感情について関心を示している資料である。

五色のしかは人が川におちこんでいて助けを求めている声をきいているとき，しかの，人を助けるという心と，自分があぶないから出るな，という心がぶつかったと思う。しかしまごまごしていたがとうとうすみから出て人を助けてやった。

この子の“心と心がぶつかった……”と“まごまご……”という表現には大変に興味を覚えた。と言うのは，“心と心がぶつかった……”とは，例えば，今自分がこう出れば相手はこう出る。すると自分の立場はこうなるだろう。今はこう出よう……，と言った人間における相互感情の摂取観の素朴な表現に外ならないと思ったからである。また“まごまご……”と言うのも人間感情の止揚と抑揚の最中における一つの心理過程現象でしかない。それを一つの心理過程現象として捉えられたが故に，“とうとう……”という表現が出たのであろう。

以上からD型の発想上の特徴をまとめてみるならば，これまでにみてきたA，B，C型は，いずれも登場人物を自己と対比させて対象としての取り扱いであった。つまり二者関係として捉えようとし，そこに道徳的価値判断を持ち出して来ている。ところがC型には，単に対者と自己という二者関係ではなく，五色のしかと男の立場をそれぞれ対比的に位置づけ，その両者を見とる立場で思考していることが目につく。男と五色のしかの立場を相互関係として認めていく人間相互の感情（注1）の流出を伴わせはじめていることである。

2. 5年生における発達的特徴

調査数30名の中，4年生で見えていたA，B，C，D型などのタイプに含まれている子どもが24名いた。内容的には4年生との差はみられないので省略し，ここでは，D型，つまり人間の犯す悪を許容してかかりたいと言う気分のみえていたタイプの，次のタイプからはじめて，完全にそれを許容してかかるまでの発達的特徴を追っていってみたい。

E型　“その気もわかるけれど……”発想（2名）

その男は，あまりわる気があって約束をやぶったのではないと思う。男は王様に命令されて約束したことをわすれてしまったんだ。だからその男は金がほしくて約束をやぶったのではないかと思う。でも金がほしいなんてそんなよくばりはよくないので，やっぱり約束は約束を守ったほうがいい。

関心の焦点は，男にある。しかもその関心は男の立場，心境をおもいはかることが中心になっている。わる気がなかった……わすれてしまった……金がほしかった，と男の行為の原因，つまり何が彼をそうさせたのかという方向での思考である。A，B，C型のような自分と対象（登場人物）との二者関係における思考ではなく，D型でみてきたような相互感情の投入が考えられる。

結局，男の行為の一番の原因は，金に目が眩んだためであり，ある意味での人間の弱さの一面性である。だからそういった不可抗力的な立場を許容することができるか，ということが，この場合の問題である。ところが，そういった不可抗力的な人間の弱さを許容するためには人間相互の立場，心情の相互理解から始まって，不可抗力的な嘘は許されるという人情肯定の考え方が投入されなければならない。つまり，道徳的にはなっとくのゆ

かないことでも，「人情の世界」ではそれもまた可であるという発想である。

この資料は，この意味においても大変に興味深い例である。“……わる気がない……わすれてしまった……金がほしかった……”までは，男の立場の理解もあり，不可抗力的な人間の弱さを許容するかに見える。ところが，“でも……”以下になると，結局は男の行為を否定し，善悪の評価しかない。「人情」の世界へはどうしても入りきれなことがわかる。

次の例も同じ型の資料であるが，このタイプの特徴をよく示している例である。

男の人は五色のしかに命を助けてもらって五色のしかのすみかをだれにも話さないと約束したのに，王様から五色のしかをつかまえるとほうびをあげる，と出た。すると男は欲に目がくらみ男はおしえてしまった。男の気持ちもわかるけれど，やっぱりおしえないと約束したのだからおしえないのが本当だ。

ここでは，はっきりと“男の気持もわかる”と述べているが，そのあとに“けれど……”がついて“わかるけれど”と逆進する。そして，結論的には“……おしえないのが本当だ！”と男の行為の否定に終ってしまう。「人情」よりも「道徳」のほうが先行してしまうのであろう。

F型　「道徳」と「人情」との対立観（2名）

私はこの物語を読み終ってから金のためにしかをうらぎった男のにくしみが自分のことのようにあとからあとからわいてきた。」だが私はその男がどんな男かよくわかった。気の弱い内気な人だ。今考えればその男はにくらしい。だがお金や宝石をつまれたらどんな人間でもほしくなる。私でもたいていほしくなっていけないことを言ってしまうだろう。

人間という動物はみんな同じだ」だが，私は王様に言った男は，わるいと思った。」

この資料は最初の」印のところまでは二者関係における絶対感情の投入がある。次の“……人間という動物はみんな同じだ。」”までの部分には男の立場に立って何が彼をそうさせたのか，という相互感情の働きからうかがえる。そこでは相当に強烈に人間の弱さ，つまり人情肯定の発想が流されている。“気の弱い内気なんだ……”・金や宝石をつまれたらどんな人間でも欲しくなる……私でも言ってしまう……。”がそれである。しかしながらそのあとになって，“だが王様に言った男はわるい……”という考え方へと流れていってしまう。一方で人間の弱さを肯定し，今一方ではそれを否定するという二面性の問題がここにある。このことは，人情肯定は人情肯定としてわきまえ，善悪判断は善悪判断としてわきまえていて相方の間に一線を引いて認識しているのか，それともどうしても善悪という道徳的価値判断の方向へとひきずられてしまうという道徳と人情との対立があるのか，考えさせられるところである。次の例も同様の対立を示している資料である。

自分を助けてくれたしかの命と王様からもらうほうびとは，どちらのほうを大切にしなくてはならぬかも考えずに，宝石などに目がくらむとはなんと言う人だろう。また，このしかはとても人間の心のわかるやさしい心を持っていて，それをこの男が一番よく知っていなければならないのにわすれて，約束をやぶった男の人の心はしかよりわるい心の持主だ。

でも宝石などが目の前にあるのなら，宝石がほしくて約束を破るつもりがなくても，宝石などのごほうびがほしいばかりに，しかのことを言ってしまうのはだれにでもある無理のないことではないかと思う。でもたしかに五色のしかのいると言うことを言ったのは，たしかにわるいことだ。それにおきさきさまが少しわがまますぎたのがもとではないかと思う。だから男が宝石を目の前にして五色のしかのことを言ったのは，仕方がのないことだ。

でもしかのことを言ったのはたしかにわるいことだった。

さきに，「人間肯定観がありながら，その反面，道徳的価値判断がつきまとうのは，そこに一線を引いて考えているためか，それとも道徳と人情の対立があるのか」という問題が出てきた。この資料でみるかぎりでは，それは対立ではなく相方を分けて考えているのではないのかということが考えられてくる。

ⓐ 約束を破った男は悪い心の持主だ。

ⓑ 宝石などが目の前にあるのなら……言ってしまうのはだれにでもある無理のないこと

ⓐ　でもたしかにわるいことだ……

ⓑ　おきさきさまがわがままますぎた……五色のしかのことを言ったのは仕方がないこと

ⓐ　でも，しかのことを言ったのはたしかにわるいことだ。

仮りにⓐ，ⓑと記号をつけたが，ⓐは絶対感情による善悪判であり，ⓑは男の立場行為を肯定する人情肯定観がある。そのⓐとⓑが交互にのべられているのがこの資料の特徴である。ⓐはともかくⓑには，強烈は，人間の相互感情の投入が考えられる。特に，おきさきを批判しているところがおもしろい。と言うのも，男はもともと五色のしかに“誰にも言わない”と約束した。これは少なくともその時点における男の純粋感情である。ところが，“おきさきが五色のしかがほしい”と言ったために，男のその純粋感情が崩解して人間の弱さが吐露してしまった。それはおきさきと男の相互感情をこの子が摂取できたからにほかない。それがゆえに，“……だから男が宝石を目にして五色のしかのことを言ったのは仕方がない……”という考え方が出たのであろう。もはやこの段階になると，始めにみてきたA，B型とは正反対に，男の犯した行為そのものを肯定するまでに，その感情は発達をとげているとみていい。ただその肯定する反面，“でも……”“だが……”“わかるけれどやっぱり……”などと，道徳的価値判断を一方にたえず備えていて，道徳と人情との間に一線を画いているのもまた特徴である。

G型　不可抗力的立場の肯定観（2名）

この型は，F型のような二面性を持つ考え方ではなく，男の立場行為を全面的に肯定しようとする考え方として特徴づけられる。

わたしは五色のしかがちょっとわるいと思う。もしその男が気を失ってから助ければ男にも気付かれずにすぐに行けたし，それにそうすれば王様からいくらでもお金がもらえても，自分ではわからないし，へんなことをしなくてもへんな心がおこらない。しかのいるところを知ってもいないし，しかに助けられたことだって知らないのに……。そうすればしかも王様にいるところを知られなくてもすむし，男もわるい心はおこさないと思う。

この感想文は，「……約束を破った男のことをどう思いますか」という設問であった。ところがこの子どもは“わたしは五色のしかがちょっとわるいと思います”と答えている。この反応がピントはずれでないことはそれ以上にのべていることでうかがえる。

気を失なってから助ければ……へんなことをしたくてもへんな心がおきない。

……しかも王様にいるところを知られなくてすむし，男もわるい心はおこさない……

この子どもの関心は男の行為の原因である。何が男をそうさせたのか？　という何がの究明である。だからこれまでの資料にあったような“約束を破るのはわるい”という道徳律はここでは当面の関心ではない。それはそれとしてひとまず置いておき，それを越えたところで思考し印象されている。とかく人間とはそのように悪に陥りやすいものである。だから，五色のしかさえ気をつけていてくれれば男は罪を犯すこともなかったであろう……という結果論的発想である。男に対する同情観すらうかがえる。それとも，男の立場やそこに働らいた人間感情の摂取が，この子どもにおいてなされたが故のことと思う。

同じ型として，次の例があった。

しかに助けられた男の人が王様に言ったのも無理もないことと思います。最初は，自分のことも考えないで男の人を助けた五色のしかの居場所や，宝石などに目がくらんでも王様に教えてしまうなんて，よほど悪い人でなくてはできないと思いました。でも，王様やおきさき様も少し悪いと思いました。夢に見たしかが本当にいるかもしれないなんて言うからこんなことになったのだと思う。夢に見ただけで王様にほしいなんて言うのは，よほどぜいたくをしているんだなあ，と思いました。でも，金銀宝石をあげるなんて言われたら，だれだって欲しいにきまっている。だからわがままを言ったおきさき様もわるい。（わたしだって宝石をくれると言われたらほしいもの。）だから男の人が欲しくなったのも無理はない。

これも前の例と同様に，男に対する同情感，共鳴感で

もって考えられている。それがために，王様やおきさきに対する批判の出ていることも前例と同じである。もはやこの段階になると，“男の人が欲しくなったのも無理はない”ということであって，男の行為を不可抗力的な出来事として眺めてみるといつた発想であることもわかる。

因みに，E型からもう一度ふりかえってみるとその特徴がよくわかる。

E型
- あまり悪気がなかった。**でもやっぱり……**
- 男の気持もわかるけど，**やっぱり……**
- 人間という動物はみんな同じ，**だが……**
- それは仕方がないことだ，**でも……**

F型
- **それは無理もないことだ。**

大きな異なりを指摘するならば，この段階では“でも，やっぱり，だが……”などという批判の姿勢が消えて，男の行為自体を“無理もない……”と許容の姿勢でもって眺める眺め方に変ってきているということであろう。

まとめ

以上，A～F型までの資料と，その考察は，“悪に陥る人間に対する許容”に到る発達的特徴を概観する基本的な事実を明らかにしてくれる。つまり，原則としてその発想が，男や五色のしかに視点のあった二者択一的絶対感情であったり，またその行為などに関心を示す二者関係での眺め方である限りにおいては，男の行為を許容する考え方は出ないということである。そして，男の立場行為等を許容肯定する考え方が生れるためには，男や五色のしかなどの立場を対比的に位置づけ，その両者を見とる相互感情の投入がおこなわれなければならないと言うことでもあった。そして，それらは少なくとも4年生，5年生の子どもたちにおいては，一つの発達的現象を示していたのである。

それ故に，「五色のしか」（注2）を教材として，授業を行なう際には，少なくともこれらの問題を考慮しておくことが，子どもの発達と実態をふまえた効率的から科学的な読書指導の基本である。

注

1. 「人間相互の感情の摂取」――主として嘘の心情をめぐって――『児童の言語生態研究』Vol. 1, No. 3.
   「人間相互の感情摂取の発達」――はだかの王様による1～6年の実態報告――『昭和47年度東京都教育課程研究集会発表資料』
2. 「五色のしか」の教材は，教科書によって，3年，4年，5年に掲載されている。

中学校の説明的文章の教材研究*

——北杜夫「せみの話」の場合——

埼玉県本庄市教育委員会
萩　原　吾　郎**

I　生徒の反応を基とした教材研究

「教師用指導書」の中で説明的文章の「教材研究」のところをみると，出版社によって多少の違いはあるが，「意図（または教材観）」「構成」「表現」「語句」「筆者」「出典」などの項目が共通している。この種の文献が全国の中学校教師を対象とし，指導的立場にある実践家が多く執筆していることを考えると，一般的に「教材研究」とはこれらの項目に従って教材となるべき文章の中味や周辺を研究することと考えられているように思われる。

一部の出版社の教師用指導書には「生徒の反応」という項目もあるが，一般に文章の側の研究に重点が置かれ生徒の側の研究がおろそかにされているように思うのだがどうであろうか。

われわれの仲間のひとり，深沢完興は説明的文章を情報論の立場から次のように解説している。「説明的文章を情報としての文献ととらえれば，当然のことながら，筆者と筆者の対じした事実の世界，生産された情報としての文章，それに情報の受け手としての読者というものの相互にかかわりあうありさま＝状況が問われなければならなくなる。」(注1)

また，倉沢栄吉は説明的文章教材の位置づけについてこう述べている。「日常生活の中で，われわれのまわりにうごめく情報の中には，必要悪もずいぶん多いが，正当な形であるべきものが不鮮明な状態やわれわれをあざむくよそおいで存在している。これらを選別し正視するためには，われわれの姿勢が対象（文章）と正しく対決する必要がある。いまや，一部の読書人でなくすべての民衆が，自分たちをとりまく知識情報に正しく対応しなければならない時代である。説明文教材は頭をよくするためにのみあるのではない。教育は，すべての国民が，知識情報を正しく処理し得る人間に育つために役だつべきものである。ゆえに説明的文章が教材として存在するのは，段落指導や要旨要点把握のためだけではないというのである。」(注2) このような観点に立つとき，説明的文章の教材研究が文章論的研究のみで事終れりとすることがいかに片手落ちであるかはあまりにも明白であると思うのである。

さらに，平塚益徳はよき個人の第一条件としてホモ・サピエンスの原理をあげているが，その中で「真の理性人とは真理に対して謙虚な人，あくまでも正確さを期する人，さらに自分のいたらないことを知って，たえず精進し，たえずよりよきものを求める人である。……理性的な人間のもうひとつの特徴は，他に対して寛大であるということである。人のことばに耳を傾け，人によくことがらをいわせることの寛大な精神，このような理性的な人びとの構成する社会においてはじめてほんとうの議論がなりたつ。相手をやりこめることだけをディスカッションだと考えることは，まったくおろかなことであ

---

* On Morio Kita's "A Story of Locust".

** HAGIWARA, Goro. The Board of Education, Honjo, Saitama)

る。」注3）と述べている

教師が文章研究によって敷いたレールにぴったり乗っかったいわゆる優等生的発言だけが幅をきかし，レールから外れた発言がすべて無価値，反価値としてしりぞけられがちな教室社会においては強制服従的人間関係は作り得ても，相互理解による真の人間連帯は育ち難いし，謙虚さと寛大な精神をそなえたえず精進する理性的個人を育てることは困難であると思うのである。子どもたちの「ほんね」を出させ得る解放された学級と，国語教室とは相補的なものでなければならないし，それはともに人間形成という教育の基本目標に直結する重要な位置にあることを認識しなければならない。

教師のたてたプログラムに従って，ステップごとにぴったりあてはまる発言をする子どもは教師にとってうれしい存在であるし，的外れの発言をする子どもはいやな存在である。しかし，教師が的外れと思う発言はすべて価値のないものと断定するわけにはいかない。主体的な読みという観点からみれば，むしろふだんは疎外されている発想や生徒こそ，より主体的であり，授業の流れの中心的存在として幅をきかせている発想や生徒はより受身的であるといい得るのではなかろうか。

すべての子どもたちは読む権利，学習する権利を持つ。優等生的発言だけで展開される授業ははた目にはきれいだし深まりを持つように見えるかもしれないが，はたしてひとりひとりにくいこみ，たくましい学力を蓄積できるだろうか。むしろ，優等生的発想は異質の発想との対比やからまり合いを通して，より正当化され強化され，あるいは否定されていくものであると考える。疎外されがちの，より個性的な発想はこのように教師志向的な発想の強化補充の役割を果たすが，実はそれは第二義的な意味にすぎない。疎外されがちの発想や生徒が授業の流れの中心にすえられ，いつも中心的な位置に居すわりがちな発想や生徒との位置の逆転がはかられたとき，同時学習者が同じ地平にたって学習が白熱化し，すべての生徒にたくましい学力と謙虚で寛大な態度がつちかわれていく可能性が増大すると思うのである。

このように考えてくると，説明的文章の研究においては文章の側の研究とあわせて生徒の側の研究が不可欠のものであると思うし，文章論的研究を先にした場合にはどうしても自分のレールを敷いてしまって生徒の反応を傾斜をつけて見がちであることを考えると，むしろ最初に生徒の反応からの研究，文章論的研究はそのあとになすべきではなかろうかと思う。毎回そうすべきかいなかについては現段階では確信がないが，すくなくとも一度や二度はこのような方法でやってみて，自分の担当している生徒がいかに幅広く多様な生きた反応をするものであるかを確認しておく必要があろうと思うのである。

Ⅱ　「せみの話」の場合

この教材は教育出版社版「新版　標準　中学国語二」に採られているものであるが，出典は「どくとるマンボウ昆虫記」北杜夫　昭和42年　角川文庫　である。

1　全体的な生徒の反応から

昭和48年5月，中学2年生を対象として東京，千葉，埼玉，山梨で反応収集を行なったが，ここでは埼玉県本庄市立本庄西中学校の場合を中心に述べる。被験者は1クラス男25，女20，計45名。資料文を黙読させ読中読後の感想を箇条書きさせる。時間40分。その結果177箇条ほどの感想（ひとり平均約4箇条）が集められた。

(1)　反応を分類集計すると表1のようになる。

(ア)　反応は考えられるほとんど全部の構成素等にわたって見られ，ひとり平均箇条数がで4あることと考え合わせると，生徒の発想がいかに個々別々の起点をもつかがわかる。

(イ)　そのうち3，6，10を起点とする反応が多いのは，「特色のある文体や表現」「中心的構成素であるせみの生態」「いわゆる随想で筆者の生活がところどころ顔をのぞかせていたり素材のせみが子どもたちの生活の中の昆虫であること」などから当然といえよう。

(ウ)　反応傾向で共感とその他の割合が6対4であるのは，この種の文章では共感が多すぎる感じがなくもな

表1　反　応　の　分　類

反応基点＼反応傾向	A 共感	B 疑問	C 反発	D 想像	計	%
1 文　題	1		13		14	8
2 筆　者	3	3			6	4
3 文体・表現	24		12		36	20
4 書き出し	3	1			4	2
5 ギリシャ詩人等	2	1			3	2
6 せみの生態	47	1	2	5	55	31
7 芭蕉・茂吉・豊隆	6		3		9	5
8 沖縄諸島等	1	1			2	1
9 冬虫夏草	4			3	7	4
10 自分の生活	7	2		20	29	16
11 教科書編集者	3	2	2		7	3
12 教　師		1			1	1
13 レイアウト	3			1	4	2
計	105	12	31	29	177	
%	59	7	18	16		100

いが，それは生徒が借りものであることや「ほんね」を書くことにあまり慣れていないなどの理由によるものであろうと思われる。

(エ) 反発傾向が文題・文体・表現に集中していることや想像傾向が6，9，10に限られていることは一つの特色であるが，これも，生徒が解放され自由な発想のしかたに慣れてくればかなり変化してくるものと考える。

(2) 個人別に反応のすじ道をたどってみると，最初に筆者について発想した生徒は最後まで筆者に関することから抜けられず，最初に生活的発想をした生徒は終りまで生活的発想が続くというような，個性的あるいは自律的とでもいう傾向がかなり顕著にみられる。

発想対象が終始同じ……12
途中で変るが元に戻る……8
} 20名

はじめと終りではちがう……25名

(3) 反応収集後に調査したところでは，この文章について生徒たちは“おもしろい”（興味がある40%，ふつう44%，つまらない16%），“むずかしくない”（やさしい13%，ふつう76%，むずかしい11%）ととらえている。

2　個々の生徒の反応から

例1　（A—6，47）「この文章を読んでいちばん感じたことは筆者がせみの一生をひじようにはかないように書いていることだ。17年も土の中で育つのに地上で鳴けるのはわずか10数日。せみのはかなさというものをつくづく感じた。」

例2　（A—3，24）「『人間たちがへたばって』など自分のふだんのことばづかいそのままで気にいった。」

この2例はきわめて穏当な優等生反応である。同類者も多い。教師用指導書の展開例ともよく照応している。だから，例1から切りこんで「筆者は何を言おうとしているのか」とか「筆者の人がらは」と展開したり，例2から「そのほか気づいた表現の特色は」と鑑賞にはいることを否定はしない。しかしそれは随筆としての指導であって説明的文章としての指導ではないから，ここではこれ以上触れない。

例3（B—2，2）「筆者はファーブルと対抗しようとして書いたのか。」

これは筆者の意図についての推測的疑問の形で出されているから，筆者の意図を「どくとるマンボウ昆虫記」全体の中から，あるいは筆者の他の著書を合わせ読むことから探ることにも，ストレートにファーブル昆虫記との比較という形でも展開できる芽であると思う。

例4（C—1，13）「題名は『せみの話』だが他の昆虫や植物のことなどが出てきて，内容が少しずれているような気がする。」

生徒たちは題名から科学的な内容を予想したようである。読みの途中でそうではないらしいと気づいた生徒でも，ギリシャ詩人や斎藤茂吉が現われてとまどったようでもある。いずれにしても北杜夫になじみの薄い生徒には新奇な文章と映ったはずであるが，それがこんな素朴な形で現われたものと思う。この反応をひとつの芽とし

て育てるなら「文題と内容との関係」としていくつかの類型にしたがった文献を資料として用意することも，さらに作文指導への発展も可能であろう。

例5（C－3，12）「この文章はいろいろなことがごたごたしているし，つなぎのところが不自然で前の文と違う文がひょっこり出てきたりしている。」

これは例2と同様表現文体に関するものであるが反発・批判の形で現われたものであり，筆者“どくとるマンボウ”の発想の自由さ，変り身のはやい想の転換という特色をずばりと衝いた反応である。したがって，例3，例4，例5，等と合わせて「筆者想定」にせまる有力な芽であると思われる。

例6（C－6，2）「この文章にはせみの特徴であるオシッコのことが書いてない。」

これは文題から生物学的な内容予測や期待を持って読んだ生徒の不満の反応であろうが，この観点から文章を見れば，書いてないことはほかにも次々に発見される。そのような作業の結果，この文章が別の意図のもとに書かれたものであることもわかるだろうし，書いてないことの書いてある文献を捜すことによって自分の求知心を満足させながら文献探査，図書選択の能力も身につけられるだろう。

例7（C－7，3）「写生派というだけで現実から少しも離れられない歌人の難しさ，またそれを互いに批判しあうということで歌というものがあまりきれいなものに思えない。」

背伸びや認識不足があるとはいえ，2年生の5月にこういう反応をする生徒がいるとは思いがけなかった。このような生徒を核として短歌や俳句の歴史や伝統の探究をめざす展開も可能であろうが，茂吉研究といったことは個別指導として扱うべきものであろうか。

例8（D－10，20）「昔，ばあちゃんちでキリギリスをとったとき手をかまれてしまった。それでも放さずにいたら血が出てきた。痛かったので逃がした。」

生徒の過去の経験がこの文章を読むことを契機として思い出という形で浮かびあがってきた反応である。この場合は「せみの話」は触媒の働きだけで生徒にとって少しも変化しないし，生徒自身の変容もない。が，これを「昆虫のとらえ方」というような形に置きかえれば文章内容と関連づけながら民俗学的な方向への発展も可能であろう。

3　単元構成への見通し

生徒の反応を手がかりとして，この文章を教材化する価値がどんなところにあるのか考えてみる。

全体傾向でみると生徒の反応は各構成素等を起点にかなり広範囲にわたっており，しかも個々の生徒は自分の発想に執着する傾きがある。また，個々の反応箇条をみるとそれぞれ個性的である。このことから，生徒が相互に自分の読んだところを発表しあうだけでも新しい角度からの読み方を発見し，読み方の幅をひろげることができると思われる。

個別の反応を検討していくと，そこには「筆者の意図，人がら」「表現」「文題と内容との関係」「文体」「筆者の発想，想の転換」「せみの生態」「作歌態度」「文学史」「茂吉研究」「生活作文」「引例」「図書選択」等々の研究や練習への芽があることがわかった。

しかし，それらの芽はかならずしも顕在するものではないし，力強い形で現われたものでもない。それは生徒たちが説明的文章の読みにおいて自由な発想のしかたに不慣れであることにも起因すると思われるが，むしろ文章の側により大きな原因があるように思われる。すなわち，構成素においても表現においても異質多種類のものが混在ないし融合して独得の文体――それが筆者そのものであるが――を形成していることである。そのために筆者の想のスピードにふりまわされがちの生徒たちは理解不足だし，文章にのめりこんでしまって，自分の世界の中へ情報をとり入れるという姿勢が弱くなっていると思うのである。爪を立ててがっちりと踏んまえ得ないから飛躍する力も弱い。このような傾向は本庄西中に限らず他の反応収集校にも共通してみられた傾向である。

このことはこの文章の教材としてのデメリットである

が，それは反面において文章の魅力となり，また学習展開への芽を数多く発芽させているという意味でメリットでもある。

さて，学習展開への芽は数多く発見されたが，それらの芽はすべてこの文章を主教材，核資料としてじゅうぶんに発育させ得るであろうか。たとえば「せみの生態研究」「写生派における作歌態度の研究」……無理である。この資料はそれらについてはごくわずかしかふれていないから，その学習の窓口にはなり得ても，生徒の要求にじゅうぶん応えるだけのものはない。このように選別していくと「筆者の意図，人がら」「発想」「文体」「引例」等々が残されてくる。これらをまとめれば北杜夫研究ということになる。もちろん，北杜夫の履歴や収入がその対象ではなく，その発想が主たる対象として考えられる。単元名としては「北杜夫の魅力を考えよう」「北杜夫という人間を考えよう」などはどうであろうか。

資料には「どくとるマンボウ青春記」「楡家の人びと」などの作品，新聞雑誌等に掲載された北杜夫に関する記事，「知的生産の技術」（梅棹忠夫），「創造思考の技術」（中山正和），「創造性の開発」（恩田彰・野村健二）等の新書版の図書が考えられる。

4　倉沢栄吉先生の指導（要約）

この文章の特色，言ってみれば北杜夫の特色は着想にある。ひじょうに自由な発想および着想の転換が行なわれる。そういうことは，自然科学系の人にはなしえないし，自然科学ではむしろやってはいけない。そういう意味ではこの文章は自然科学的な説明文ではない。

しかし，人文科学的な説明文を自然科学系に対立させる意味でわれわれは強化する必要がある。自然科学的な説明的文章は言語以外の媒体がだいじになるが，人文科学系のものは言語に頼らざるをえない。この文章は非常に自由に言語を駆使しながら着想の転換をやってのけている。（それを随筆と言っても少しもかまわないが）人文科学系の中には，そういう着想の自由が認められていて，その武器を駆使したところの，ある人文科学的の論理を持っているというふうにみて，北杜夫のひとつの特色として与えていいのではないかと思う。

「せみの話」という文題であるから，生徒がせみのことを書いた自然科学的な文章だろうと予想したのは当然のことである。また，そういう部分がないわけではない。しかし，せみの話をつっこんでやるにはそう適当な文献ではない。つまり，自然科学的な説明的文章だったらもっと映像と相補的でなければいけない。言語だけであろうとしてはかえって不正確になって事実を伝えることができない。だから，説明的文章の本質は言語の方からいうと自然科学系のものであるより，むしろ人文科学系，社会科学系のものにある。

どう考えても結びつかないようなものを結びつけるところに，ぼくらもにこっと笑いたくなるような着想の飛躍みたいなものがある。それがこの教材のひとつのメリットだとすれば，その研究はこの文章では逃してはならない。それは生徒が気がつく。教師が気づかせてやらなければならない。

単元の問題だが，あなたがたが言っているように「人間としての筆者研究」だと思う。従来「筆者想定」は説明的文章を中心として，筆者を想定することによって文章の脈絡なりその文章の出現なりを深くつかみとろうとするための方法だった。ところが，今ここでわれわれが話し合っているのは筆者想定，筆者追究そのものが目的なのだ。「筆者としての北杜夫」言ってみれば「どくとるマンボウ」とはどういう人間なんだということを追究することが単元の中核に当然なるのではなかろうか。人間に迫るということは決して自伝とか特殊な掲載品によるだけではなく，こういう軽い読み物によってもできるわけで，また人間に迫っていくということは文章を読むときのたいへん大きなめあてになる。

人間に迫る迫り方としてどういう単元の題目にしたらよいか，どんな単元の組み方にしたらよいか，今ちょっと名案はないがこの文章だけではだめだということはいえる。週刊誌にあった遠藤周作の対談とか，「週刊読書人」等の人物紹介，全集の解説等々から迫っていく読書とい

うことも考えられる。

この文章に出てくる固有名詞をだいじにしたい。せみ以外の固有名詞をすくいあげただけでもひとつの地図が描ける。あるいはオーバービューができる。固有名詞をずうっとすくっていくというような手法がアプローチのしかたのひとつとして考えられる。

引 用 文 献

1　深沢完興　〔説明〕（倉沢栄吉・藤原宏編「読解・読書指導事典」第一法規　昭和48年　P.248）

2　倉沢栄吉　「総論　説明的文章の教材化について」（倉沢栄吉・井上敏夫編「講座説明的文章の教材研究　小学6年」明治図書1973　P.12）

3　平塚益徳　「原点に立って考える」（「望星」 創刊号 P.26　昭和45年6月10日）

（この研究は石川善雄，石川修三，岡野一男，杉村禎美，萩原吾郎，林務，深沢完興，安居総子の共同研究の一部であり，日本読書学会第17回研究大会に発表したものである。）

資料紹介

全国連合小学校長会情報公害研究委員会調査報告

「情報公害意識の調査と対策」

本調査は，全国連合小学校長会の調査研究部の一部門が，児童の生活態度，興味，物の考え方にあらわれている，安易に流れやすい，自分中心的であるといった傾向の原因の一つとして，マスコミの影響は大きいとしてとりあげ，実施したものである。

研究の目的，ねらいには次の項があげられている。①児童の健全な成長を阻害すると思われる情報公害の実態をとらえ，それに対する対策や留意点を確立する。②学校，社会，家庭の教育の場で情報公害に対処する方法を確立するための資料を提供する。③情報公害の実態を公表し教育環境を改善するための資料を提供する。

調査は，教師(A)，父母(B)，5，6年生児童(C)，対象の3部からなっている。調査地域は，北海道から九州までの全国8地区で，各地区の市街地，農山村がサンプルとして選ばれ，調査票回収総数は19,861にのぼる大規模なものである。但し，調査票の項目数は多くなく，教師用が3部7項目，父母用7部9項目，児童用7部14項目であり，ほとんどが選択方式である。

全体的結果として，20項があげられているが，その主なものを紹介する。

(1) 結果は全国大体同一傾向であり，情報公害の影響は全国に同じように及んでいる。

(2) 市街地，農山村の差はほとんどない。

(3) テレビ，週刊誌（子ども用マンガ），ポスターなどの情報源が大きな影響力を及ぼしている。

(4) そのため児童には，道徳性の低下，快楽的殺那的になる傾向がみられる。

(5) 児童の生活時間をみると，テレビ，遊び，学校がその中心であり，読書，研究，家庭での学習にはほとんど興味を示さないようである。家庭での生活はテレビを中心として左右され乱れている。等々

読書に関連をもつ項目についての結果を紹介すると次のようである。（市街地の結果）

・児童が情報公害を特に受けているもの

	（教師）	（父母）
映画	4％	25％
雑誌・週刊誌	54	69
テレビ	79	60
広告・ポスター	50	58
子ども用マンガ	64	34
子ども仲間の話	13	8
大人の会話	13	16

・日常生活で影響が強くあらわれる点の中で，興味をもつ図書の傾向を選んだものは教師で12％，父母では20％であった。

・家庭での情報公害対策としては，雑誌，週刊誌の購入を制限する（11％），良書を多く読ませる（36％）という結果となっている。なお，ここまでの数字は，3項目選択の結果である。

・児童の生活時間のうち読書の時間

	平日	休日
1時間以上	19％	31％
1時間以内	39	35
ほとんどしない	38	32

・毎月の生活で一番好きなことでは，

友だちと遊ぶ	(67%)
テレビを見る	(61%)
マンガを読む	(43%)
スポーツをする	(47%)
雑誌や週刊誌をみる	(7%)
勉強する	(5%)
すきな研究をする	(12%) で，
読書をする	(28%) となっている。

この調査の特徴としては，マスコミの影響の悪い面にだけ焦点をあてていることと，それに対する教育上の対策を論述するための資料とするために計画されていることの2点があげられる。このため，調査全体がマスコミの悪影響（これを情報公害ということばでよぶ）を摘発するように構成され，考察もその点に集中している。児童の生活にマスコミの影響が大きいことは確かであるが必ずしも悪影響ばかりではないことは多くの調査が明らかにしているところである。本調査のようにある点を主張するために計画されたきらいのあるものは，それが選択肢の作成のしかたの中に微妙に反映されるため，データの妥当性という点で問題がある。

願わくば，マスコミの影響を情報公害ということばにおきかえ，被害者意識にひたることなく，マスコミ社会を積極的に生きる子どもの教育を考えてほしいものである。

（高木　和子）

会　　報

常任理事会（3月30日）

出席　岡本　倉沢　滑川　福沢　室伏

欠席　出雲路　阪本　深川　増田

(1)　賛助会員獲得の件

滑川会長の尽力で，博報堂が賛助会員として入会した。ただし，滑川会長在任中という条件づきである。

(2)　事務局移転の件

日本女子大阪本研究室に残してあったバックナンバー等の荷物を，3月23日に野間研へ運び，すべての引越業務を完了した。

(3)　ＩＲＡ第18回年次大会の件

1973年5月にアメリカのデンバー市（コロラド州）で開かれる第18回ＩＲＡ年次大会に，阪本敬彦理事が参加し，Children's Reading in Japan の題で発表することがきまった。

(4)　ＩＲＡ研修旅行団受け入れの件

同旅行団が1973年7月13～15日に東京に滞在する予定を立てているので，恒例により，学会としてこれを歓迎し，授業参観などの手配をすることが決まった。

(5)　公開研究会の件

昭和48年度の公開研究会の年間テーマを「読書指導の学際的研究」としたい旨，倉沢副会長から提案があり，これを承認した。

(6)　第17回研究大会の件

事務局提案の準備日程を承認，直ちに準備委員会を作ることになった。準備委員会の構成は，会長，副会長，常任理事全員のほかに，高木和子（東京成徳短期大学），桑原隆（東京教育大学），有沢俊太郎（東京教育大学）の三氏に依頼することに決定した。

会期は8月2～3日の2日間，会場には東京都立教育研究所を予定し，準備を進める。

(7)　事務局補強の件

阪本理事渡米中の事務局の運営に遺漏なきを期するため，会員高木和子氏の協力を求めることがきまった。

昭和47度における常任理事会出席状況

	出席回数	欠席回数
出雲路猛	3	4
岡本奎六	5	2
倉沢栄吉	6	1
阪本敬彦	6	1

滑川道夫	6	1
深川恒喜	0	7
福沢周亮	3	4
増田信一	3	4
室伏　武	3	4

補は次点で落選した。開票結果次の通り。

当選	Lynette Saine Gaines (米)	7,371
当選	Ira Aaron (米)	5,917
当選	Tracy Tyler (米)	5,229
次点	Takahiko Sakamoto (日)	4,491

第17回研究大会準備委員会公（4月5日）

出席　有沢　出雲路　岡本　倉沢　阪本　高木　滑川　増田　室伏

欠席　桑原　深川　福沢

(1)　委員会の構成の件

3月30日の常任理事会の決定通り。委員長に倉沢副会長を選出した。

(2)　プログラム編成の件

主題を「読書研究の新しい視点」と決定。講演2本，シンポジウム1本，会員研究発表16本で編成することになった。

公開研究会（4月28日）

昭和48年度第一回の公開研究会は，同日午後2時より東京教育大学E館273号室で開催。岡本奎六氏と岡田明氏の対談。司会室伏武氏。主題「読書指導の学際的研究」

公開研究会（5月19日）

午後2時より東京教育大学E館273号室で開催。講師増田信一氏，司会出雲路猛氏。主題「小・中学生と読書」

常任理事会兼第17回研究大会準備委員会（6月1日）

出席　出雲路　倉沢　阪本　滑川　福沢　有沢　桑原

欠席　岡本　深川　増田　室伏　高木

(1)　機関誌発行の件

「読書科学」第16巻2号（通巻60号，47年9月発行分）は8か月遅れで5月末に納本された。

(2)　ＩＲＡ第18回年次大会の件

阪本敬彦理事は発表を終え，5月13日帰国した。

(3)　ＩＲＡ役員選挙の件

ＩＲＡ理事選挙は4月2日開票されたが，阪本敬彦候

(4)　ＩＲＡ会員の受け入れの件

南ダコタ大学教授 Dr. Cecil Kipling 一家が来日し学校参観を希望してきたので，倉沢副会長の紹介で5月29日，中野区立桃丘小学校へ案内し，中原国明会員の授業を参観した。阪本理事，沢井和子氏(野間教育研究所)が同行。このあと東京教育大学を訪問，滑川会長，倉沢副会長と懇談した。

(5)　韓国教師団の受け入れの件

8月はじめに韓国から教師のグループが来日し，その一部が本学会第17回研究大会の傍聴を希望している旨，外務省から申し入れがあったので，これを許可した。

(6)　読書科学賞の件

本年度の読書科学賞受賞候補者について，会員および有識者から推せんを求めたところ，本田和子，岡田明，倉沢栄吉，与田準一，古田拡の各氏が候補者として推せんされた。審議の結果，読書指導と読解指導との接点を明らかにする数々の著述を重ねてきた功績に対して，倉沢栄吉氏に賞を贈ることが決定した。読書科学研究奨励賞については，出雲路猛氏の「児童文学におけるファンタジー論」の完結一件のみが候補作品として推せんされたが，審議の結果，同氏の受賞が決定した。

(7)　第17回研究大会の件

研究発表の申込〆切日をすぎたが，まだ発表者が不足しているので，手分けをして発表者を補充することになった。

公開研究会（6月16日）

午後2時より東京教育大学E館156号室で開催。講師山花郁子氏（調布市児童婦人課）司会倉沢栄吉氏。主題「こどもと読書――社会教育の立場から――」

Vol. 17, No. 2 September, 1973

THE SCIENCE OF READING

Published by The Japanese Society for the Science of Reading
c/o Noma Institute of Educational Research
Kodansha, Otowa, Bunkyo-ku, Tokyo, Japan.

President: Michio Namekawa **President-elect**: Eikichi Kurasawa

EDITORS

Takeshi Izumoji Shinichi Masuda Takeshi Murofushi
Takahiko Sakamoto Kazuko Takagi John Downing
Donald Leton

CONTENTS

Original Articles

Senior high school students' reading interests and attitudes ……*HIRAGA, Masumi*…… 35

Grammer and reading model of comics……*SAKAMOTO, Ichiro*…… 48

Performances

Children's thoughts about the man who broke his promise in "The Five Colored Deer" ……*MATSUBARA, Shinichi*…… 57

On Morio Kita's "A Story of Locust" ……*HAGIWARA, Goro*…… 65

Official Notes …… 72

第17巻 第2号
<通巻 第64号>

昭和48年9月30日 発行

会員頒布 会員外頒価 500円 ~~(会員外頒価 400円)~~

編集 日本読書学会編集委員会
発行人 阪本一郎
発行所 日本読書学会
〒112
東京都文京区音羽2—12—21
野間教育研究所内
振替東京3213番

印刷・第一印刷株式会社

昭和四十八年九月三十日発行（年四回発行）